

# 三重県総合博物館資料叢書

Mie Prefectural Museum Collection Report No.12

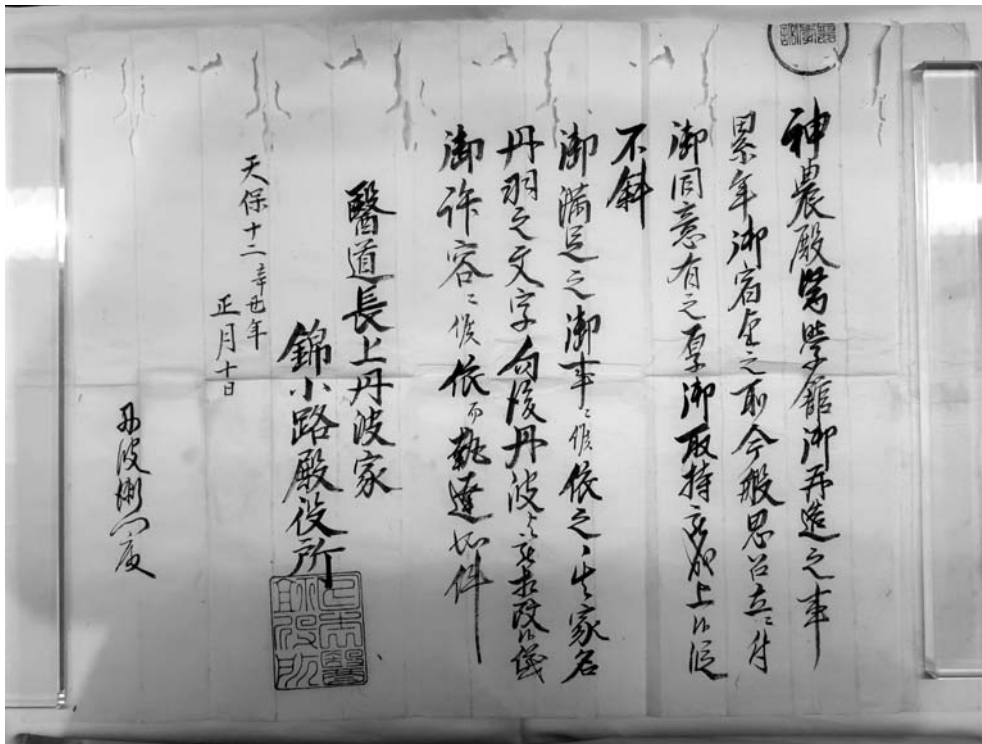
No.  
12







5 御陣屋御用医仰付及帯刀免許状写



6 丹波姓使用免許状



丹波家文書



ごあいさつ

三重県総合博物館 (Mie Mu) も開館後ようやく一〇年という筋目を越えることができました。これも多くの皆様  
が、基本展示は勿論、企画展や各種イベントにご来館いただき、当館をご利用いただいた賜物であると厚くお礼申  
し上げます。

『三重県総合博物館資料叢書』は、研究活動の一環として行った資料調査の成果や、収蔵品を中心とした資料目  
録、また資料翻刻などを掲載し、皆様のご利用に供することを目的として編集しております。今回は、近代におい  
て本県を代表する本草学者の丹波修治の関係資料「丹波家文書」のなかから、丹波家の本業ともいえるべき漢方医学  
の講義資料を取り上げ、その翻刻を掲載しました。

文政十一年（一八二八）に尾張国に生まれた丹波修治は、伊藤圭介のもとで本草学を学び、後に朝明郡川北村、  
現在の四日市市の丹波家の養子となりました。そして家業である医業の傍ら本草学者として多くの書物をまとめ、  
明治十年（一八七七）に東京で開催された第一回内国勸業博覧会では三重県職員として関り、内務省から審査員に  
委嘱されました。

資料叢書は、当館が所蔵する資料を中心に、その翻刻や目録などを引き続き刊行していく予定です。本書が、三  
重県の歴史や文化、自然についての研究に寄与できれば幸いです。

今後とも、より魅力的な博物館となることを目指して活動を続けてまいりますので、皆様のご支援、ご協力をお  
願いたします。

令和八年三月

三重県総合博物館

館長 守屋 和幸



目次

あとがき	資料解説	翻刻	凡例	目次	ごあいさつ	口絵
.....	.....	.....				
41	35	1				

## 凡 例

一、本冊は、『三重県総合博物館資料叢書』No.12として、当館所蔵の『丹波家文書』のなかから、医学講義に関する記録を翻刻掲載したものである。

一、翻刻にあたっては原本の体裁を重んじるよう努めたが、挿入書きが多く、そのままの体裁ではかえって煩雑となることから、次のように改めた。

(1) 挿入は適宜本文内に入れたが、へ～を付し、本文よりポイントを下げたてて区別した。

(2) 頭注は「」を付し、ポイントを下げたてて表記した。

(3) 抹消文字は表記しなかつた。

一、使用漢字は原則として常用漢字を用い、それ以外は正字を採用したが、俗字・異体字・略字等をそのまま用いたものもある。

一、収録にあたって、以下のような表記を用いた。

(1) 適宜、読点、並列点を付した。

(2) 虫損、破損等による判読不能文字は、字数の判明する場合は□で、文字数が不明の場合は「」で示した。

(3) 文字に疑義がある場合は(カ) 或いは(ママ)と注記した。

一、本冊の翻刻及び解説は当館資料整理ボランティアの西村悠佳が、編集と校合は小林秀が行った。

翻

刻



# 1 金匱要略口義

(表紙)

「金匱要略口義」

聞説城南才子家

磯野弘道ノ親玄仙、瓜葶ヲ用ユル奇談

(二丁半白紙)

三

問曰、全体(此篇ハ)、仲景ノ語ト云フ、チキレクニナリテ居シヲア

ツメナセシモノト見ヘテ、故ニト、ノワヌ也

氣色相家ニテハ、氣ハ氣色ハ色ト別也、凡色ハ鼻ヲ第一トス、有寒ト

ハ水氣也、非時トハ、夏ナレハヨケレトモ、其他ハアシ、此アカキ

ナドモ、トヲ云ナルコトハ、見覺ねハ知レヌ也、青キハ陽氣内ニトチ

ラレル、黒キハ血氣ノ凝結セシ也

四 凡病人ニ対セシトキハ、息サシヲ氣ヲツクベキ也、暗々ハクモル声也、

啾々ハサビシクホソクナガキ也、陽氣ノシメラレシ声也、秋ノ虫ノ声

五 是モ心ヲ用テ氣ヲツクレハ、病ノ知レル也

六 呼吸(カラタノ―スル也)動―

七 動トハ、肝王スレハ弦ト動ク也

八 冬至ヨリ六十日タチシヲ、甲子ト立シ命也

九 浮ノ脉、寸ト尺ニテウツニテ病ヲ命ス、極ハツカレルコト也

十 今ノ内經ニハナイ、古ノニハアリシト見也

十一 卒厥ノ、ニワカニ厥スルノ、臟ニ入ル、府ニ入ルトヲ弁命、滑ハ氣

ノトゴリテ居ル也、入府ハ陽ノ分ノアサミヘヲシ出スナリ、卒厥モ

絶汗ハワルイ也、死証也

十二 前証ト同意、脉脱トハ、ヌケカラニナリシ也、病ノ重クナリシハ、

スベテコノコ、ロヘニテヨロシ、ヲビグサ・タスキグサナトノタグイ

十三 不在、其中ニテハ其義不詳、シイテムリニ義ヲツケヨウトヲモヘト

モ、義モツカヌト云位ノコト也、手ヲツケズニ、ソノマ、ニシテヲカ

ねハナラヌ、ソレハナセナレハ、病証モワヅカニシテ、カスアワヌ、

六微モトント前後ナイコトニテ、六府トモ云ヘキトコロ也、六極ハ、

病源候命ナトニハ詳ニ出タリ、ツカレタルコト也

清邪居上以下侖五邪、難莖ナトニモ出タリ、出トコロニヨリテ、カゾヘヨ

ウチカウ也、コ、ハコ、ニテ見ルヘシ

大邪傷寒、中風ノ類也、風ハ(朝ナト)陽分ヘウケル、寒ハ夕ナト明分

ヘウケル、湿ハ氣ノ、別シテワカレメノ節ナトヘアツマル

經ハ動脈ノワタルトコロ也

絡ハ血脉ノワタルトコロ也

十四 命両感表裏前後有急、傷寒命ニテハ、表ハ寒、裏ハ虚、故ニ虚ヨリ

スクウ也

急トハ、外ヲカヘリ見ルコトハナイト云タメニ、急ノ字ヲ加

十五 是治療ノ大法也、サシヒキ手段手ジユンヲ示ス

十六 有得、ソノ臟ノコノムトコロノモノヲ得ルハ愈也、病者―以下

前ト義不属也

十七 是モ末義前ト不属也、如渴以下コ、ヘ渴ノ証ノ出ヘキニモアラズ、

コ、ニホント治方法ノ出ヘキニモアラズ、錯簡モ多キナレハ、知タト

コロダケヲサムベシ

百合狐惑病

十 弧惑之為病、湿熱ノ血分ニムねテ、心肺ノ分ヘ逆スル也、―トハ、

人ノ氣象ガ何トナウカワル也、放心イリクム、(色慾金銀)執着スル

コト多ナト、諸病トモニ湿熱ノ心家薰蒸スル也、蝕トハ、狐惑ノ病ハ

虫ノ添モノ故ニト云也、腫ル、イタムナトノ類也

喝、カル、嘔、コレモカレルコト也

芩連姜トクメハ虫ヲコロス、苦参、湿熱ヲトリ虫ヲコロス

猪苓散ハ金匱ニ出テ居方ナレハ、心氣ニハカマワス、湿氣ヲトル薬也、或ハ古方ニ別ニアリシヤ

十三 血分ニ熱力盛ニナリシ証也、——欲臥氣ガウチヘムク也、鳩眼或ハ黒、湿熱ノ故也

赤小豆当販——痔毒ナトノ上攻セシニ用テ功アリ、漿水ハ湿熱ヲトリ、氣ヲオチツケ血分ヲ清ス

十四 陽毒、傷寒ノ毒ノ陽分ヘツキシ也、七日サレハ病明分ヘマワル、鳥獸虫魚ノ毒

十五 明毒、明分ヘ傷寒ノ毒ノツキシ也  
瘀血也、咽喉痛——ノ証ニハ、明明毒ニ氣ヲツケ別ツヘシ、明毒ニハ、明分ヘ行ク椒雄ヲ去ル也

全体百合——ト云病名ハ、一向今ノ医者ノ云ワヌ名也、只今ニテモ随分多キ病也、下焦ニ湿熱ノインキシ麻瘡ナドノ類ノアル人、傷寒ナドノ毒ニアヘハ起ル也

#### 中風歴帯——

八 十三条ト、モニ弁ス、此三焦ハ、一身ヲ三段ニ別チシ也、四属ハ成無カ説ヨリハ四支ト見ル是也

黄汗ハ、モミノキレシモ黄ニナルヨウナモノ也

九 十一十二 コ、ラニ中風ノ字ハナケレトモ、スヘテ風症也

脚腫、足ハハレテ、如脱トハ、足ニハカ、ワラズ、体ノソキトリシヨウナ也

十四 礬石ハ湿熱ヲトル也、逆上甚キ人ニ、足心ニハルコトアリ  
附方、痲ヤマイト云コト也

肺痿（湿熱アリテ津液ヲスイトラレルカワキシ病也）（与萎同）肺癰（湿

熱アリテ、氣血ワイテイキレテ腫物トナル也）效逆上氣病云云

皆ナ肺ノ臟ヘ属スル病也、右ノ寸部ヘアラワレル病也

肺痿ニハ、虚寒ノ証モアリ、癰ハ全テ湿熱ニ属ス  
上氣ト今云——トハチカイ、呼吸ノ氣ノイキタワシクハヅンデ、ヲトノスル位ナル也

一 因、ツタツテマイリテ 便難ハ、腸胃中ニ熱アリテカワク故也

二 痿ト癰ヲ弁別ス、後世ノ方書ニハ、痿ニモ膿血ヲ吐ヨウニ云シハ誤ナリ、辟々カワク血也、膿血ノ出ト、胸ノ痛、脉ノ実シテ、フツ／＼ト豆ツブノヨウニ滑ニシテ数ナレハ癰也、数虚ニウツハ痿也  
萌キサスメノ虫

三 微則為風、陽虚ニ風邪ヲウケシ也、微ノ氣分ノ虚ノ証ト数ト云、血熱ノ実ニ属トヲ二筋ニ別ツ  
呼吸ノ氣モメヨウテ（呼吸不入云）、咳ヲナス也（ワケヲ論ル）

四 産後或ハ脚氣傷寒アトナトニ多クアル症也

五 後世馬痺風ナトヲ肺脹ト云、ナニモソレニカキリタコトテハナイ、風寒ノ氣ノ、肺中ニコモリアツマル故ニ脹ル也

六 肺ノ虚冷シテ、肺痿トナルヲ論ス

属ト云コトガ病ニアリテ、此ハ何ノ病ニ属スルクルワ／＼アリテ、人品ノ色々アルニタトヲ  
甘草土生金

甘草土生金

十四 咳而上氣肺脹ハ、寒邪ガ肺ヲトリマワシテ、肺氣中ニコモル、ソノウチ兩種アリテ、右ノ寒邪ノ症ト、又陽明ノ氣逆シテ鬱シコモル也、目如——目ノ肉ノヲチル也、婢ハ千金ノ例ニナライ、脾ニ作ルヨロシ、生姜甘棗ニテ石膏麻黄ヲキワドクナイヨウニスル也、半夏、陽明氣ノフサカリシ故、痰ノ生スルヲトル也

十五 心下ニ水カ出来テ、肺脹トナリシ也

此方ニテ心下ノ水ヲアタ、メ、メグララス

引缺血ハ心下水氣ノ証也

辛温ノ劑ニテ、寒邪ヲ外ヘモ發シ、石膏寒邪アレハ、内ニ熱カ生ル故也

小兒ト云コトノ出タルハ、小兒ニハ多キ故也、馬痺風ハ全ク胎毒也、始ニハ麻杏甘石ナトヲ用ユ、裏ヘ入レハ下劑ヲ用ユル也

十七十八 全ク肺ノ燥ク也、凡肺ハ、脾胃ノ方ヨリ仕送リヲスル也、故ニ肺ハ、ウヘキノヨウナモノ、脾胃ハ土ノヨウナモノ也、此条モ、スチナラヌトコロヘ津液ヲタツ、トモテシテシマウ也、此方ノ四味ツレダチシ方ハ多キモノ也

生姜瀉心 小柴胡 四君子湯

脾胃ヨリタチノボルユゲ、ツユノ榮衛ノ氣ヲ、此四味ニテ補也

廿 本文ニテハ、桔梗湯カ用テアルガ、里外台ニハ——白散ヲ用ユ、豆母ハ、氣ト痰トコリカタマリシ濕熱ヲトキホトク也、近ク云ヘハ、クリ、ナトモホドク、巴豆、イキレコモリシヲ破リテシマウ

廿一 肺ノ臟エタマリ居ル、ウミチヲトリマスル方也、甲錯ハカサ、ムねノハサ名

葶莖、ヨシノクキ、水アカヲトル也、痰飲ナト也

瓜弁、マクワウリノ弁也、アフラアカヲヨクトルモノ也

廿二 千金ニ肺癰ニ用テアル也、上焦ノ氣カヨワヌ故ニ、浮腫酸辛ハ、鼻ハシラノイタム也、肺氣ノフサガリ也

葶レキ、アマリ用ユルトキハ、下ルカ、マヅハ小便ヲ通ス

表ニ寒邪アリ、心下水氣ヲ小青龍ニテトリテ、ソノ上ニテ此方ヲ用ユ

奔豚氣病脈——十二日同雲滿天

ト云病ハ、ホソノ下ヨリ積ガ、(任脈)マンナカトコロヨリム

ナサキヘ、サシツメトリツメル、上ニテハ心火ノ臟ヲトロヘテ、下ヨリ腎水ノ氣ガ水克火トノリコム也、全体難聖ナトニテハ、五臟ノ積ヲ、各有名腎ノ積ヲ奔豚ト云ヘリ、火氣ノ逆スルモアリ、水氣ノ逆シテノボルアリ

一——ノクルワノ病ヲ論ス、吐膿トハ、肺癰トハチカイ心ノ臟ニゴリシ痰ヤ、悪血トマチリ合テ、桂支湯ノ条ニアル、其後必吐膿血ノ类、火邪ハ、灸ヤ焼針ヤ、ソノホカ火ヲモチテ療治ナドヲナスヲ云也、ヒノシ、フンジャク、皆心部ヘアツカル病也

驚ハ、ミナアナガチニヲトロキト云コトニテハナケレトモ、先心ニアツカル病也

二 フトロキヨリ起ルコト、今モヲ、クアルコト也

三 生葛、陽明ノ熱ヲトリ、胸ノ熱ヲトル、甘草(食用ニスルスモ)、根白皮 甘草ノ二種アリ、胸中ヘ濕熱ノ上リシヲヒキサケル

小柴胡ノ意ト四物ノ意モアル也

四 灸ヲスヘテ外ノ寒邪ヲヒラク、桂上逆ノ氣ヲクヂク

オトロキニヨル也

五 臍下悸ヒユワ、スル也、水中ニ氣ヲフクミ、珠子出来ル、茶ノアワヌヲ、甘爛水ニテ煎レハ、アウモノ也、クイツト水氣ヲタ、ラシナルクスル也

胸痺心痛短氣病(ムねノイタム、ムナイタノウラノ一面ニ痛也、甚キハ、

上ツラノ皮ヲナテテ痛モノ也、痰喘鳴ナトノ症カ、必添

モノ也、背マテモ痛モノ也、スイブンアル病也)

(ミソヲチニテ病、是ヲ——ト云)

心痛、ハバヒロニハ痛マズ、ツボンテ痛也、短氣人ノイキハ、ホドノアルモノ也、ソレガミヂカキ也、腹ヲ明ト見レハ、胸ノ皆病ニテ、十二八ハ明寒ノ病也

- 一 夫脉——スヘテノ病ノ脉ヲ云タモノ也  
陽不及明大過（明氣陽ノ位ヘオカシフサガル故也）、責センギヲシツメル也
- 二 寒熱アレハ、或ハ外邪ガ明明ノメリナリニアツカルナレト、是ハサモナクテ実也
- 三 小緊、数ハ明寒ガ逆シセマル故也  
薤白 白酒、作りヨウワ後世知レヌ、是ハ上焦ノ氣ヲ一身ヘメクラス、諸白ヲカリ用、イニシヘノクスリサケ
- 四 不寝ハ、痰ガトチフサガリテ居ル故也
- 五 痞、センヲサシ、ヨウニフサガル
- 人參湯（即理中湯）ハ、身カタヲツヨクシテ、逆サセヌヨウニ、ウチウラヲツヨクシヤウトヲモヘハ此方、ヲシクササントヲモヘハ前方
- 六 肺氣ヲヒラキヨキアリ、脾胃ヲ氣ヲメクラスカヨキアリ  
芍杏甘、脾胃ヤワラカニ、水氣ナトヲメクラス  
橘枳姜、キヒシク痰ヤ氣ヲヒラク也  
噎塞ハ、ギチトツマル也
- 七 緩急、痛ダリユルンダリスルコト也、畢竟ナカヒキテトキく起也
- 八 是ハ、胸中ヘ明寒ノ氣ノキビシクアタリシ也、大小腸ノ明寒ノ邪ガ、経ヲツタイ上ヘ逆セル也  
赤石脂、心ヲカタメ腸ヲカタム、痛ヲトメル  
腹明寒疝—
- 九 腸中ト、コリシモノアリテ、ソノ上ニ外邪ヲウケシ也、腸中フサガリ居故ニ、外邪ガヨウ発セヌ也  
桂支湯ニ芍薬ヲ去リテ、全テ陽氣ヲメクラスタメ也、小承氣ヲ加ヘシハ、腸胃ノフサカリヲトル
- 世間ニヨク用ユル方也、痢ナトニモヨロシ
- 十 腸中ニ寒氣ノアル也、切痛、キリツケルヨウニイタム、腸中ノ寒、陽氣ヲ上ノ方ヘボイアゲテユク也  
粳米、大腸ノ逆氣ヲ下ス、ムねヘ逆セシキヲ、ハラワタノ方ヘ下ス、凡米ムキ豆ナトヲ、ニヘヤワラカニナルヲ度トス
- 十一 胃実也
- 十二 大柴胡、両脇ヨリシマルヲユルメテ、腸胃ノ実熱ヲホトク、両脇ニアツカラねハ、承氣ノタグイ
- 十三十四 ハラワタハカリノ実テナクテ、脾胃ノ虚ニ乗シテ、胸マテモ上ル也、此ノ症ニハ、虫モ必添モノ也
- 十五 明寒ニセマラレテ、陽氣ニハツミガツイテクル也  
両方ナレハ、少陽ノ肝経ニアツカルケレト、偏ナル故ニ寒也、湿熱ト明寒トヲ兼ワタル薬也  
ヨク用ユル方也
- 十六 〈明寒ノタメニ〉厥逆ノ二字カ四支ノヒヘル位ノコトニテナク、心氣マテモウシナウ位ノコト也  
赤丸、古昔ハ薬ノ色ニテ名クルコトヲヘシ、別テ丸散ニ多也  
射岡ハ毒薬ニテ、鳥頭ノタクイ明寒ヲヤブル
- 十七 弦ハ陽氣ノメクラヌ—也、緊ハ胃中ノ陽ノシメラレル、自汗出ハ、陽氣ガ表ヲマモラヌヨウニナリシ也  
烏ハ明寒ヲヤブリ蜜ニテ（鳥ノイラヒトキヲ）ヤワラケル
- 十八 肝血ノ不足シテ居人ニヨロシ、羊肉ハ黄耆ト功似タリ、肉故ニ尤モ血ヲ補  
日本ニテハ羊肉ナキユエ、ヨク用度コトモアレト、ヨウ不用、乾牛肉ニテモカヘテ用ルカ
- 十九 内外ニ明寒トチテ、薬モ灸モ用テモキカヌ也

抵当トハ、病邪ニキヒシク——スル也  
為中病中ハ、病ニ薬ノテキチウセシ也

桂支湯ニテトク也

廿 下其寒大黃附子湯ナト

明中有明、コトニヨルト、アタ、メル薬ヲ用ナラヌコトモアリ、コ、  
ハ熱ト寒、ムスホレテ居也

○附方

廿一 明寒ノ氣カ、三明ノフカキトコロヘ入シ也

廿二 肝ヲユルメ、脾胃ヲメクラス

桂支湯、任脉ヲユルメ、柴胡ニテ脇ヲユルメル也

卒中ハ、今ハ中風ニコソ用ねト、古ハ何ニテモ——ナレハ、——トス

廿三 中惡、惡氣ニウタル、風寒暑湿ノヲサタマリノホカニ、別ニ惡氣カ  
アル、ソレヲ云也

以綿——ソウセヌ□□ブ故也

通治ヲシナメテ—ス

飛尸ハ、人ノ目ニ見ヘヌ虫也、鬼撃天怪也

何レモ名ト筋ハ別レトモ、明寒ニテ心痛腹ノ—症ヲナス

廿四 十一月廿六日晴、寒風切肌

問曰、病有ト云二字アル故ニ宿病アリテ、ソノ上ニ宿食ナル也

浮而大ハ、氣カド、コリ居故也

廿六 下レハ腹スクヘキニ、食ガクヘヌハ実物アル也、心下（按之）、カ

タキハ実也、属虚ノ証ハ、トヲモ下サレヌ也、宿食ハ吐下ノ二也、脾

胃ヲツヨシ、或ハメクラス、或ハ寒ナトハソノワケヲ療スル也、宿食

ハ、吐下ノ二ニテ療スル也

廿八 宿食ト、脾胃ノ陽氣トねチレヤウ也

心痛胸、明寒熱ノ症必スアル也

廿九 一寸見レハ外邪ノヨウニ見ヘル、ヨク宿食ト外邪トマチカウコト  
也

五臟風寒——風寒外邪ハ、邪表ヘアタリ、チスヂヲ深ク奥ヘヲソ  
イ入ル也、是カ先ツ通例也

此篇ノ風寒ハ、五臟ノ方ヘ深ク、スクニウケシ也、故証モ常トチガ  
ウ也、スクニ五臟ノ風寒カ積ニナル也

一 肺中風、風寒湿ノ邪モ経脉ノ中ニアレハ輕キ也、臟ニ入レハ命サカイ  
也

身連而重（クラク、スル也）、（陽氣ガ外ヘメクラヌ故也）

二 ——色々アロウナレト、先ツ一ツ挙ク

三四 頭目瞶ハ、アタマヤ目ガ、ブルク、トフルウ也

五 舌本厥明聖ノメクルトコロ、其汁ハ、タバタモノ、汁ヲ吐ク也

六 如索——脉スチハタチテ、一向ウタヌ也、弦ノ死脉也

七 著ハ、寒湿ガイツイタヨウニ肝ニツク也

餐 欲熱ハ、胸中ニヒヘルトコロアル也、スナワチ瘀血也、只今ニテ

モ、産後ナトニ欲熱飲者瘀血也

○腎死臟浮之——

○問曰、竭者氣竭也、○堅者大便堅也

（二丁半白紙）

茵蔯 トカク黄疽ニ用ルニ、カキリテ居ル、血分ヘ湿ヲモチシヲトル也、

湿熱ヲ小便ヘトル也、アトヲトス、シクス

茵ノ痛ナトハ、脾胃ニ湿熱ヲモチシ故ナレハ、用テヨシ

蔓荊 前ノ升麻ナトノ部類ノモノ也、大陽聖ヘカ、リ、上部ヘ風ヲモチテ

居ノ、ナンテテ首カラ上ニト、コリ居ルモノヲメクラス

紫菀 寒熱ハ肺ノ方ノ寒熱也

（二丁白紙）

藥性哥

蓮肉 是カケツコウナモノニテ、心脾腎ノ三臟ヘユクモノ也、上ニテハ、心氣ヲ涼ク清クスル也、下ニテハ、腎ノ津液ヲシメク、ル、中ニテハ、脾胃ヲ補也、汗泥中ヨリ清花ヲ開クモノ故ニ、心氣ヲ清クスル也、香ニテ心ヘ行、味シブル故ニカタム

肉桂 桂枝ト主治ハ、大程全シモノニテ、枝ハ表ヘユクシ、肉ハ裏ノ陽氣ヲメクラシ、筋ヲ通ス、コレハクミテニヨリ腎命門ノ陽氣ヲ補也、腹ノ中ヘナト、シツカリト陽ヲ守ラス

桂支 ヲ、ダ、イハ全シキ故ニ、傷寒命ニハ皆支ヲ用ユ

莫朱 厥明肝聖ヨリ、道中トシテ陽明胃ノホウヘ入シヲ治ス、ノドギリニスキ水ノ出ルヲ胃酸トシ、ロマテ出ルヲ酸水トス、是モ肝氣ノ逆シテ胃

脾ヘ入シヲ治ス、尤破氣ノ燥ス劑也、下ヘ氣ヲオシサケル劑也  
延胡 ヨク呉朱——トクミ用、氣ノフサカリ、ト、コリシヲ治ス、瘀血ナト見レハ用ユ、疝腹痛・腰痛、氣ノツカヘヌヨウニスル

神麵 凡ソコウジハ、脾胃中ノ濕熱ヲ消化シ、スカス功アリ、チヨウド食物ヲ、コウジノヨウニ、コニシテシマウ也、故コウシヲ用イシコト也  
六神ノ天地四方ノ鬼神氣ヲアツメシ

コムギコ セイコウ(青蒿) 赤小豆 杏仁 蒼耳(腎ノ熱) 野蓼  
六月六日、七月七日、五月五日ナトニ、医タルモノハ制シラクヘシ、藥ヤノ——ハ、制シヤウアシ、故ニ功ウスシ、消食痰氣

麦芽 大麦ヲモヤシニシテ用ユ、コレモ食ヲスカス、麦ノ精ハ芽ニナリテシマウ也、脾胃ノ食物ヲ、メヲキリテ、ヌケガラニシテシマウ也、ムギハ明ニ属シテ、血分・水分ヲスカシ、コリヲトル也、故ニ妊婦ニ禁ス

牽牛 苦児トアレトモ辛ニ燥ナルモノ也、葶藶ト似タレトモ、ケンゴハ破却明寒氣為也

葶藶 下氣為主也

姜黃 (氣分ヘ行コト多シ) ウコント一体同類ノモノニテ、氣血ノコリ、ト、コリシヲホトキメクラス、手ノ痛ニ多ク用イテアルガ、手ハ足ニ比スレハ氣道ニ属ス

鬱金 (血分ヘユクコト多シ) 氣カタニテ、胸サキニテ痛ニ用、胎毒モ氣血ヲ鬱結シテナス、月経ノメクラヌナト

蒺藜 平補ノ劑、肝腎ニ臟ヲ補、右ノ二臟ノ風氣ヲサル也、インキン、ヒゼンノ年ヲヘテ、ガサク、フケノタツニナト用ユ

白芨 (セキソリ) 箍劑ト云、シメテシホリヨセテ、濕熱ノ氣ヲトルモノ也、明礬ノシメルヨウナ意ヲモチテ居ル、五味子ナトノヨウナ酸キ味ノモノニ、功似ヨリシモノ也

蛇床 辛苦温メモノニテ、腎ト脾胃ヲ補也、氣ヲヒキサケテ、脾胃ヲアタム、惡瘡——腎命門ノ、フカキトコロヘ含シヲ、腎命門ノ陽氣ヲ補イ治スル也、インキン、婦人ノ明中ノヒユルナトニ用ユ、下ヒヘル痲病ノナカキナトニ用

天麻 風藥トテ、五臟ノ中ニ含ム病也、癩病・中風・驚風ナトモ、ツマルトコロハ風也、肝氣虚セシ中ニ風ヲ含ム也、ヨワキ木ハ風ニ中レハ動ヤスシ、先メマイニ多ク用

白附 風濕ヲ去ル藥也、トキニ此——ハ、面ノ病ヲスヘテナラス、面ノワルクロキ、ハタケ、ナマス、ソバカスナトノ病ヲ治ス、血分ニソブガウクト、ソレカ面ニアラワル、トコロ也

面風、口眼歪斜ヲ云也、血分ニ風氣ヲ含シヲ治ス  
全蝎 全ク風ヲサルモノニテ、風ト云ハ、ワイノ、申ス五臟ニフルクアルアセ也、何レ風病ノヒキツケヲナラス藥也

蝉退 凡ヌケカラノ類ハ、ミナ祛風ノ劑也  
トカク上ノ方ヘ、風熱ノアツマリテアルヲ去也

痘瘡ナトノ毒モヨクサル

排毒 驚風 耳目

蜂房 露——、木ナトニカケシハチノス

湿熱ヲヨクトル

ムスポレ、コリテカタマリシ湿熱ヲヨクヤブリトルモノ也

ハチノスノヨウニ、アナヲアケテホトキトル、毎命虫ノ類ナレハ、殺虫

〈湿熱ヨリ生セシ〉ノ功アリ

花蛇 白——、ツねノクチナワニテモ、功ハ似タリ、肝ノ筋ヘカ、リ、血

ヘカ、リシ風ヲサルモノ也、ヒゼンナドノ、トヲシテモナヲヌノニハ、

花蛇ナトヲ用ねハナラス

癩 癩癩 狂乱

槐衣 大腸ニ風熱アレハ、虫カ出来ル

大腸ノ血分ノ熱ヲサマス

鼠粘—涼散ノ剂、凡外タモノニナルヘキモノガ、陽明内ニコモルト、ツ、

ンテノドガハレルナト起ル、瘡氣ヲウチウラニテケス

(別紙挾込)

九月十六日晴

瘰(ソリノ病)、湿(シツアタリ)、喝病(アツケアタリ)、瘰ハ瘰ノ誤リ

〈ソノアヤマリモ古シ〉、宋ノ代ノコロヨリモ瘰ト書ケリ、何レモ軽重

浅深ハアル也、何レモ太陽至ヘハイル(アツカル病也)、病ナレハ、ヒ

ト、コロヘヨセテ篇ヲナス

凡金匱ノ病門一病ツケテアルアリ、五ツ、モ六ツモヨセテアル篇アリ、

是ハ、ワケノアルコトニテ、類縁ノアル病ヲヨス、コ、ニ大事ノ事ガ一

ツアル、凡病ハ、類縁ノツ、キノアルモノ也、同シクルワノ病ト云コト、

ツタイノ病ナト云コトアル也、是ヲ人ニテタトウ、一家親類ニテ、一人

ノ人ヲ、ヒトガラヲ見ルスチアリ、又一ニハ、官ハダレノト同役、又

住所ニテ、誰タトナリヲナシ居ル、或ハ口業、或ハ年齢ノ同類、或ハ

宗門ニテモ、人一人ニテモ色々ノ類カタツ、病ニテハ、咳嗽ハ五臟ヨリ

言ヘハ肺ノ、上下ニテ云ヘハ上、氣血ニテ云ヘハ、氣ハセメテヨリモ、

コノスチヨリスル、アノスチヨリスルトコウト云ヨウニ、色々トアル也、

心ノ方ヘツキシ故ニ、吐血モ驚ト一ニシテ、篇ヲナシテアル也、ソコヲ

見サバキ、ユカねハナラス、トカク万病トモ、ツタヘクルワアル也

全体金匱ハ、傷寒傷ニヒキツゞキ命スルモノナレハ、風寒ノ病ハ傷寒ニ

マカセ、モウノコルトコロハ瘰湿喝也、瘰ハ寒湿ノ氣ヲヒタジウケテ居

テ、ソノ上ニ風邪ナトヲウケ起ル、傷寒命ニヒキツゞケ命スルナレハ、

コウアルベキ也

一 太——ヒヘノカチシヲ剛トシ、風ノカチシヲ柔トス、瘰病ノワケハ、

七条ニ詳也、コ、ニハ剛柔ヲ詳ニ命ス

二三 發熱スルナレハ、脉ハ浮大ニウツヘキニ

四 汗ヲ發、津液不実シテ起ルスチモアルコトヲ示ス

六 スヂカワキ(ソコヘ風寒湿ノ氣ヲウ)、瘰ヲ發ス

七 ツキノ条ト一也、始ニハ、瘰ノアタリマヘヲ弁ス、如蛇ハ、ユルミテ

脉ノウツ也、滄々ハ、蛇ノアルクヲト也

八九 灸ヲスヘレハ、マスノ津液ハカワキ、火ヲモツ也

十 其証備トハ、脉浮頭項—惡ト、ソロイタチシヲ云也

沈遲、陽氣カシメラレル也、コノ方ハ柔瘰ニ用テヨキ方也

凡破傷風ト後世ニ云テアルハ、コノ方ノ意ニテ療セヨ

括莖ニテ上焦ニフサカリ居ルヲ通スル也

十一 小便モ汗モトズラレテ、上ヘ逆ス、口禁ハ、胃明ノ聖脈ノシマルコ

トノ甚キ也、葛根湯モ前方モ、何レ瘰病ノ表ニアル、カルキトキニ用

ヘキヨウニスル也、石須口—ハ桂麻トクム故也

十二 瘰病ガ裏ヘ入テ、ウチウラノ証ヲナス也、断齒ハギリ承氣ニテ、瘰

ノ熱毒ヲ下ス

十三 以下、湿アタリノ病ヲ、色々カタリワケル、痺圣脉氣ノフサガリト  
ヂラレル

十四 熏黄トハキナ色ヲ、又フスベタヨウナ色也

十五 或胸、以下ヲ湿家ノトコロヘモトルト云説ト、上文ヲウケルト云説  
トニアル也

十六 下之ハ、下スマヂキヲ下セシ也

十七 是ハ、外邪ハスヘテ汗ヲ発スルハアタリマヘナレトモ、風・寒・湿  
トモニ汗ノ発シ、アンバイノ色々アル也、故ニ方ナトモ色々アル、風  
ト湿ト也

十八 アタマヘアタリシヤ、腹ヘアタリシヤ、下ヘアタリシヤト云コトヲ、  
唐ニテハ男女トモニ沐ス、サヨウナトキナトニ、湿ヲ頭ニウケナトス  
ル、内薬鼻中ハ瓜蒂ヲ多ク入ル、鼻中ヨリ黄汁ヲ、ク出ル

十九 麻黄、加朮―ヲ用ケキ病者ニハ、多ク灸ナトノスヘタキモノ故ニ弁  
ス

廿 皮肉ノ間ヘ、フルキ湿ヲフクンテ居也、取冷ハ納涼ナトヲセシ也

廿一 表陽虚シテ居ル人ノ、湿ヲウケシ也、ウチヨリ胃腸ヲハリ出サセル  
也

廿二 傷寒ト見テ居ルウチニ、風湿ニテ、傷寒ニテハナイ也、小便白利ハ、  
津液ガ陽分ヘワシル故也、桂支去芍加附ハ、陽ヲ補ナカラ湿ヲトル也、  
此方ハ専ラ湿ヲトル也、如冒状ハ、メ立マヘニ、カキクモルヨウナモ  
ノ也

廿四 近之則痛、ソコヘハヅミノツヨキ也

(半丁白紙)

薏苡― ヒトクチニヘコリムスポレシヲ水氣ヲメグラシ、湿ヲ小便ヘ去ル也、  
拘風、クチヲユルメルニハアラねトモ、スチノ湿ノト、コリヲトル故也

肉蔻 (直等) トノヨウナニテモ、一ツニ功ヲアラワス、虚寒ノ証デナケ

レハ用ラレヌ、実熱ヤ、脾胃ニトバコリシモノ、アルニハ用ラレヌ也、  
尤食ヲヨクス、ム

草蔻 草菓ノ功ト全シヨウナモノ也

脾胃ヲ、カラリトアタラシクスル也

訶子

草菓 草豆蔻ト―トヲ、補用ナトニテ一ツニシテアル非也、功能ハヨク

似タリ、脾胃ノフルビシ湿氣ヲハライサル也  
温眠疫ノヨウニシテハツロウ也、瘴ハ山氣ニウタレシ也  
常山 熱ヲヨク (痰ヲ) 吐スモノ也、瘧毒ナトニテ、水脹ニナリシニヨロ  
シ

## 2 黄帝内経素問発端

文政三年四月七日

黄帝内経素問発端

「家ノ説平素問答」

此書ハ、素問ト名ケシハ、古来ヨリノアタリマヘノ名也

「素問トハ古来ノ名也」

素トハ、平素ト熟シテ、不断常々ノシタジヨリノト云ニアタル也、問ハ、  
ヨクコ、ロヘシ人ニ、トワねハナラヌ也、不断ニコ、ロガケテ、問答ヲシ  
テオクコト也

黄帝内経カラセシハ、是ハ唐ノヘタシカナ証拠ハナケレトモ、王冰コノカタ也、  
漢書芸文志ニ黄帝内経十八卷、黄帝外経三十六卷ト名目カ出タリ、夫ヲ王  
冰ガ、素靈二部ヒキクルメテ、内経ト見トリシ也、内トハ、一タイ肝要ナ  
骨ノトコロヲ云ヘリ、夫ヲ手広ク、トキヒロケシヲ外ト云ヘリ

黄帝トハ、マコトノ——ノ時分ニ此ヨウナ、ナカクシキコトヲトキハセ  
ヌ也、シカシ、《道家モシカリ》医者本スチハ、源ハ黄帝元祖ニス、道ノ伝  
リシハ、黄帝以来一部ノ書トナリシハ、戦国ノ時テモアラレト、徂朱モ見  
ラレタル也、夫マテハ、至テ簡古ナ文ニテツタワリシヤ、戦国ノ時分ニハ、  
此ヨウナ医書ヤ、道家ノ書ナトノ行レシコト也、黄帝ノ筆ヲトリテ、書セ  
ラレタト云コトニテハ毛頭ナイ也、是ハ、佛家ノ釋迦ヲ源トシ、道家ノ老  
子ヲモト、スルモ全シ

此書ハ、何レニモ医書ニテハトントモトナリ、仲景モ僕用素問難経ニモ、  
経曰ニヤトシテ、古キトコロヨリ今ニ至ルマテハ、名医タチモ本トシテ命  
ス、此書ニソムケハシメ医術ハ異端邪流也、佛家ノ釈迦ニソムキ、儒者ノ  
孔子ニソムシモ全シ

近来ニ至リテ、古方家ナト云ウナモ出テ、素靈ナトヲ明明邪流ノ説ナト  
云テ、小島ノ中ニテ、ボヤ々々ト百年以来異説ヲ講習ス、夫ラニ陥ラヌヨ  
ウニ、一生正道ヲトリウシナワヌヨウニスルヨロシ、シカシ、人情ニテコ  
トズクナ、コトズクナ、口先ハカリテ療治シ、古キヨリ伝ハリシハンク  
ワノ、京モ、或ハ江戸ナトニテモ、カク異説ヲ講スルハ可歎コト也

第二席、発端ニ申述ヘキコトハアラマシ、昨一日申シノヘシ也、注ハ唐ノ  
王冰アリ、是ヨリ前、楊上善・全元起、今伝ラレシ太素聖ハ、

「一王氏、位高スキル、大ニヨロシ、二張氏、道ニ以来ワカリヨキヨウ、手近キ故ニ  
用ルコト也」

吳混ト張氏・馬氏・王氏、世々多用注也

二代ノ道ニカ注ヲ省テ、本文ハカリヲ天下ヘ伝ヘシハ甚發明也、コノ本文  
ハカリクリカヘシク、讀ハ、最上ノコト也

医ノ根本トナリ、子スヘニナルト云書ト云コトヲ、ヨクコ、ロヘテ、億説  
邪見ヲマチヘズ、医者タルモノハ読ねハナラヌト云コトヲ、オウヨウニ、  
スナヲニートスズニ讀ヘシ、前日ニシタヨミヲシテ朝聞、又アトヨミヲス

ルヨロシ、カクナセハ、大分学問ノ上ルモノ也、是ハ学問ノ手ハズメ也、  
夫ノ出来ヌ人ハ、素読ヲシタカヨロシ、コナタニテモ、傷寒金匱ヲ素読ヲ  
イタシ、夫ヨリ素靈ヲ讀也、是ガ儒者ノ五経ヲヨムヨウナモノ、書生中ニ  
一二度モ読マケハ、一生ノ医道ノタねト云コトアリ

凡物ニハ、種ト云モノナケレハナラヌ也、素靈ハ医道ノタねニテ、是ヲヨ  
クヨミマケハ、一生トボシカラズ、或ハ志ノアル人ハ、書入ノ本ヲウツス  
カ、聞書スルモヨロシ

世間一統ニ、素靈ノヨウナマワリトワイ、ヤクニタ、ヌモノナト云ヨウナ  
コトヲ氣ノ毒ニ存ス

毎朝一例ニ連ヌモノナレハ、世間ノヲモワクハカリノ多々出ル甚アシ、  
一ツニテモ、身ニトリテヤクニタチ、用ニタツヨウナ聞カヨロシ、

マタ發端ニ、色々弁スヘキコトモアリ、且卷ヲヒラクニツイテハ、弁ヲカ  
ねハナラヌコトトモハアレト、初心ノ人ナレハ略之

書生中ニ、タねヲシコンテオクカヨロシ、オツ、ケ父兄ニ使ねハナラヌユ  
エニ、ウチステ、シマウ也

朋友ノ間ニモ、ズルケヌヨウニ進メ合レルヨウニ希コト也

「畢竟精神カヌケル故ニ、病生スト云コト主意也」

上古天真論一、以下八十一編、スヘテ此篇名ハ、唐ノ王冰ヨリコノカタノ  
定リシ也、夫ヨリ古シヨリノマ、ノ名モアル也、全元起ガ本ナトニテハ、  
大キニ名モチガイ、前後シテ文モアル也、此篇名ハ、篇中ノ文字ヲキリ出  
シ、イカウフカキ義ハナイ也

「旧本トハ、楊上善ヤ全元起ガ本ヲ云也」

昔在——、全体医道手前ノ本ハ、不断平生ノ養生ヲ第一トタテルコト也、

且常ヲ知、変ヲ知ノ理モアル也

養生サヘ出来無病ナレハ、畢竟医ト云モノハイラヌ故ニ、養生ヲモト、  
ス

以下条々、此条ハ何ヲ論リシヤト、ソレヲトクトコ、ロヘ、ヲ、ク、リヲ  
コ、ロヘ読居ルカヨロシ、此上ニ攝生ナト書テアルハ、婁聖ノヒキ合セ也、  
二代ノ道三ノ考ニテ、コ、ニ載也

生トハ、ギヤツトウマレシトキ也、神靈瑞相アリテ常ナラヌ也、登天トハ、  
天子ノ位ニ即セラレタル也「登天聰明トモシテアル」、天師トハ、天ノ徳ヲソ  
ナヘシ師ヲ云也、漢書ナトニテヨクアル字也、道家ノ文字也

凡ソ医書ハ道家ニヨルガ、岐伯ハ公侯伯子男ノ伯ト云ト説ト、此説ハワ  
ルイ、此セツ五等ハナイナト云、何レニテモヨロシ「岐伯ノコト、今ワカラ  
ヌコト故也」、有常トハ、ギヤウギナコト也、妄トハ、道理ニソムキシコト  
也、持満トハ、器入ニ水ヲ一盃入テ捧シカタチ也、御神コ、ロノコマニタ  
ツナユルスナ也、生楽天生ウケエテ居ルタノシミ也

夫上古——上下別テハアレト一段也、下世人カエルハ旧本ニヨル也

精（明ノ神）神（内ノ神）、愚智（智ノ方ヨリ）賢（徳ノ方ヨリ）云也——  
廿日朝晴

帝曰、人年——、主意ハ、人ノ子アルト云ハ、凡十四五ヨリシテ、女ナレ  
ハ五十位、男ナレハ六十位ガ通例也、ソノワケヲトケリ

材力（チカラタね）（カラタノカイシヨトヲク） 材力天數ハ、畢竟氣ト理ト  
ニテ云也

天（ホトコシヲウケルモトナリ）癸（ミヅノト）、明精ノ名氣ハカリヲサシ、  
形ナキヲ云也、先輩ヨリノ説ニ、交合スルトキノ感通スル氣ヲ云也、畢竟、  
腎水ワキ出ルモトヲサシ云也

真牙トハ、一チアトニテ生スル齒也

「男女七八ノ數ノコトハ、家語ニモ審也」

地道、男ヲホトコシ、陽氣ヲウケ化スルヲ地道ト云也

丈夫——女ハ血ノ方ニテ云、男ハ精ノ方カラ云也

男ハ陽ナレハ、明ノ方ヨリ先ヲトロヘル也、形体ノ極、ツカレルニ至リキ

ワマリシ也

腎ハ、自ラ精ヲ制スルコトハ出来ス、唯五臟六府ノ水ヲ主リ、蔵シテ居ル  
也、五臟盛ナレハ、腎自ラ盛也

不過尽八——ヲキテ、サホウ也

凡經書ノヲシヘト云モノハ、アリフレタ道理ヲ常ニテカタリヲク、チヤウ  
トヂヤウギスマ、カネテワタシヲキテ、変化ニハ、其読人ノ手前ヨリ  
（アンバイヨクツカイユク）設スル也、其変化マテカタリユクハ死物トナル  
也、十四マテニ子ヲハラムヤ、六十スキテ子アルナド、云コトハ知レヌニ  
ヨリテ、語ラナイナト云ハ甚タ非也、此常ヨリ推シテ知レル也

「花ノハヤザキ、ワスレザキ、子ノ出来ルヘキ位ノ道具サヘ具レハ、早晚ニカ、ワラ  
スシテ出来ル理也」

黄帝曰、上古有真人、此一段ハ、養生ヲ得タル人ヲ四段ニワケ、学者ノ目  
アケトスル也、道家ノ方ノコト故ニ、聖人ヨリ上ニ至人真人ナトタテタリ、  
佛者ニテモ、上ヘモリアケルカ常也

精氣ハ天地ノ精氣也、肌肉——、アタマヨリ、アシノツメサキマテ、氣  
カツラヌキ居也、至人トハ、トント手入ヲシテ、マモリマツトウシテ、真  
人ニナラズ也

視聽ハ——智恵ノ遠マテモ及ス也

挙不欲觀於——仕事ノ上ニテ、アマリ見ヌクキヨウナコトハ見ナラヌ也  
弁別星辰ハ、天文ナトヲ考ヘル也、此ノ賢人ト云ガ、今学者問場ニテ、コ  
ノトヲリニスヘキコト也

四氣（四時ノ氣ト云コト也）調神大命、四時ノ氣ニシタガイ、吾補氣

ヲト、ノヘル也

「大命トハ、カクヘツ大切ナ命也」

万物四時ノ氣ヨリ手入ヲシテユカネハナラヌ也、人モ又シカリ、儒者ニテ  
ハ、内則ノヨウナモノ也、夜臥——明氣ヲ身ヘ久クウケル也

夏三月、陽氣ノカクヘツ盛ニナリテクル也、ソレヲウケテ、万物シケリ秀也

「奉長少トハ、タねノスクナクナル也、長ハ夏ノ政也、収ハ秋ノ政也」

（一説也）冬至リテ重テ病ム、容平トハ、マンヘンニスル也

十二日

○冬三月、此——水氷地——、陽氣ノ内ヘシリゾキカクレシ証拠也、伏、ヒ

トニ云ヘヌナイノコト、私意、就温熱トハナク、ホドヨクアタ、カナ

ルトコロヘツク也、無泄皮——熱キコタツヘナドアタレハ、皮フヲモラス

明明文通ヲトク

○天氣——人間ノ陽氣ハ、天ノ氣ト一ナルモノ也、人ノ身ノクルイヲカタ

ルトテ、天ヲ命ス、天ヲ命トリモナラセス、人ノカラタノ、ウチノコト也、

故不下ハ、天ヲチタノ、日月ノヲチタノト云コトハナイ、天氣者閉塞——

天地氣不升降

「天トハ、ヘカクシク明ニラク、クラク徳ヲ藏シテ居也」

菟、イキレムセコモルコト也、不相保トハ、モチ合ヌコトヲ云也、奇病、

サマノナ雑病也

○逆春氣、上ヲウケテ、少陽不生トハ春ノ氣也、内洞（カラニナリ）、独沈

ハ、ヒトリイツイテシマウ也、道者聖人行之、聖人トテ、別ニハナイ道ニ

シタカウ、スナワチ聖人也、小人ハコレニ反ス、内格トハ、病ニアラズ、

道理ヲ——スル也

○是故——

（以下白紙）

### 3 方彙記聞

（表紙）

「方彙記聞」

舌菌

因ハ、上焦ノ痰、或ハ火鬱シテ、反テ上ノ冷ルアリ、右ハ温藥ヲ用ユ、

頭冷ハ、二陳加減、或ハ導痰加減ヲ用ユ

（朱書）

『今日万』

十月五日

方彙濁証——トハ、ヒト、ヲリ、白濁トテ小便ノ白クニゴル、赤濁、

赤クニゴル

心虚者、熱、腎虚有熱、内者湿熱、虚冷ノ命門ノ陽不足、或ハ脾胃ノ陽

氣下陷ノ起、下焦虚シテ、虚火湿痰湿熱ナトヲソヘテ濁——トナル也、

——遺精ハ余歴ト皆ナ同シ（ユキノコリ便所ニテ不通）、——モ、シマイ

ニハ消渴ノ、カワキノ病ニナル也、

——ノ人ハ、小便アワダツ、且ツ臭氣ヲ、ブ

清心連——ヨク用

連肉、心脾腎ノシマリヲツケル、茯苓トクミテ湿熱ヲトル

知母黄栢、下ノ水ヲ増シ、上ノ火ヲウツ

加味四卷、此証マ、アルモノ也

草解——各高キ藥也、腎虚シテ、命門ノ陽不足シテ湿ヲオブ、草解、下ノ熱

ヲトル、益智命門ノ陽ヲマス

滋腎——腎ノ湿熱ヲトリ、命門ノ陽ヲマス

白濁ハ寒、赤濁ハ熱ト古人ヨリ命ハアレト、赤白トモニ畢竟ハ熱ニヨル

也

水火分清——水ヲ下ヘ通スル藥ト、中ノ陽氣ヲマシ、氣ヲハリ出ス藥也

滋明——腎虚シテ、中ニ熱ノ出来テ——トナルニ用

二陳湯——コヘシ人ハ、多ク湿痰ニヨル、篇二色、膀胱ノ熱ヲトリ小便ヲ通

ス

一方—湿熱ヲ小便へ通スルヨウニ、クミ合セシ方也、白果ハ银杏也、痰ヲヨクトル也

加味—肥脂トハ、小便ヲシテ、上へ油ノヨウニギラくトウクヲ云也

香苓—心気ヲシツメ、水道ヲ利ス

草解分清

辰砂—名高キ方也、散ニシテ用、今ノ安神散ヲ用ユル意也、一体心気ノ方

へキク薬也、濁証ニモキク、故ニコ、挙ク

麝香香木香 胸ノ気ノト、コリヲチラス也

遺精、覚ナク精ノモレル也、夢精或ハ漏精ハ、精ウチニ動ケハスク

ニ泄ル

脾胃ニアヅカル飲食ノ気ト、コリ、気下へメクラヌ、或ハ心虚腎虚下焦

ノ湿熱、下焦ノ陽氣不足

清心—心ノ熱ヲサマシ、心気ヲシツメル

連肉、カラダノ大切ナ津液ヲシメトメル也

養心—専ラ下ヲシメル也、ミツクキノミ黄実シメル

連菴モ専ラ渋劑也、痢ナトニモ用

保—肝腎精血ヲ補、黒炒姜ニ陽ヲ守ヲツケル、且内外上下ノ熱ヲトル

婦元湯、四物—

補—ヨクハタラク薬也、精滑モ漏精也

婦脾—止再当作、止舟与前同

益智—巴戟命門ノ陽ヲマシ、下焦ヲ補也

一薬一切へワタリシ方也

兼濟—桂枝加龍骨蚘ノ湯也

枹杷—

肝腎ヲ補也

神芎—玉門不閉トハ、明門ノミニアラス、コ、ニテハ精室ヲ云也、家蓮、

肉家ニウヘヲキシ—也

茯—慾心トハ色慾也

補中益氣

汗証門ヨリ此マデハ、畢竟全シ勞役虚分ニ属ス、何レ心腎ノ二臟ニアツ

カル、虚勞門ヨリ親類門ノ病ナレハ、治方ヲ通シ見ルヘシ

淋証、或小便ヲコラヘテヨリ起ルモアリ

五淋—赤芍ニテ血ヲ補イメグラス

八正散、臍下水道ノ熱ヲ解ス、臟腑トハ此デハ大便ノコト也

必効—上ノ肺ノ熱モトリ、下ノ腎ノ熱モトル也

尿淋、尿ノ字譌ニテモアルベシ

滋明清火—

益元固本—随分コ、アル証也、精ヲシメル劑ト、下焦ノ湿熱ヲトル薬也、

甘梢コズヘハ甘草ノウラ也

加味滋明—痰血虚腎虚胃氣不足ニ心ヲクバル方也

一方

補中益氣—陽氣ヲ上へヒキタテ、下へタリサガルヲ治ス

四君子—

六君子、膿血ノ出ルコトハナクテモ、小便ガボツリトシテ出ル、ソレ

ガドヲモコタヘラレヌ也

龍胆瀉肝—

清心蓮子—

一方—次早アシタ、皮硝、苳硝ノ制シヨウニヨリカクナル、是モ下ノ熱ヲトル

參苓—琥白血与水、コリアツマリシ血分へアヅカリシ水病ヲ治ス

二木散

生附—泣シブリ

海金—加減八味九料—、ヨク老人ニアル証也

六味丸—淋病ニシテ唾痰スルハ、多クハ腎家ニ属ス  
地黄丸—

八味丸料、沈香、イタミヲトメル也、人参、久病ナレハ、ツカレタルヲ治ス

關格、格則吐逆關則不得小便

疝氣ヤ痰ガ上ヘツキテ、上下ノ關所ガギチトフサガル

楨榔—

遺溺<sup>ワスレ</sup>、至テ大病ノ（下焦ノ陽虚也）、モウ死ヌルト云トキノ——ハ、

是ハ必死ノ証ニテ、治方ハホドコセス、コ、ニテハ、別ニ一門ヲ設ク

因、氣血ノ虚、下ノ腎ノ虚、心脾虚、湿熱、小兒ノ——ハ下ノ虚ニ属ス

参芪—

滋榮—補中益氣、失禁、トメヨトヲモテモトマラス

滋明—腎虚ノ人ニヨクアル、ヨリキク方也

六味丸、鹿角、腎ヲツヨク補ウ也

小便閉

猪苓湯

清肺—肺ヲ水源トモ云ヘリ、金生水ノ湿故ニ肺氣不利、則小便不通

加味五苓—

参帰—脾腎ノ二臟ニ虚熱アリテ生ス

四物湯、通開丸当作関、氣短ハ呼吸ノ氣、小腹マテトゞカヌ也

加味—咳喘ハ痰アル徴アリ

補中益—

滋明—何レモ病ノ本ノ方ヘツケタ方也

導水—

禹功—水道ヲ解シ熱ヲトル方也

通開丸—熱水トハ、ヨク煮タル水也、スナワチ湯也

導氣—初ハ血洩リ、下焦ノ血カワキテ、右ノ証オコル

大便閉、熱、津液燥結、蟲瀆ニトチラレル

補藥ヲノミテ—、或ハ脾胃虚、熱ノミナラズマ、アル、寒氣ニトヂラレル

コトアリ、故ニ一槩ニ下劑ヲ用ラレヌ、乾姜附子ヲ用ねハナラヌ也

食傷、氣、痰

潤腸—右ノ諸因ヲ兼ね治ス

鎖陽腎ヲ補、大腸ヲウルヲス

三和散—氣ノトゞコリ、疝氣ニテ大便閉ルニ必用ノ方也、ゼンタイ風痺・

氣痺・湿痺ノ三ヲ和スル藥也

一方—熱デトヂテ、大便不通ト云マデノコト也

六磨—磨スルハ、右ノ粉ヲ入テ磨スル也

八珍—

十全大—中風ナトヲ、ワズライソウナ老人ノ、大便ノ十日モ廿日モ不通ヌ

コトアリ、ソレヲ治ス

痔漏、此—ト云モノハ、キレヂ・イホヂ何レニモ肉中ニテコリ

テカタクナリ、クリノクニナル、其中ハ痔也、重クナリテアアアク、ソ

レヲ漏ト云ヘリ、蓮根ノヨウニナル

血熱、瘀毒、（婦人産後）下焦瘀血、脾胃虚シテ、下陷スル痢毒

温熱、痢毒ト痔毒、病ハコトナレドモ、モトハ同シ

凡病、ソトヘモチ出シ、病ナガクシク外へ出アル病ヲ、ニワカニ治ス

レハ、スヘテ内へ入テ害ヲナス、故出サカリノ病ヲ、ヘシトオサヘツケ

レハ、内へ害ヲナス

故ニ痔ハ外治ヲ施ス、外へウバイトルガ常法也、藥ハ血熱ヲ解ス

当帰—地榆、大腸ノ湿熱ヲトル

祛風—苦参、至テフカキ血熱ヲ解ス

祛毒—槐角、エンシユノサヤ、是モ大腸ノ熱ヲ解ス

皂刺、サイカチノツノ

一方、靈脂、瘀血ヲヨクトク

秦艽―風薬ヲ多用テ、毒ノヨルヲチラシ發散ス、故ニ痒ニヨクキク

紅花―因而飽食―以下（為痔マデ）素問ノ字面、北方トハ腎ヲ云也

加味香薷―氣カタヨリ起リシ痔也、故ニ氣ヲツカヘハヂキニ起ル也

乾葛―酒毒ヲ解ス、黑豆毒ヲ下ス、尤血熱ヲトル、白梅ムメボシ

秦艽―

加味四君子―是ヨクアル証也、血ヲアマリ下ス故ニ、ブツノヨウニナル病也

秦艽蒼朮―是モ、ヒト、ヲリノ大腸ノ濕熱ヲ解薬也、量入トハ、病人ヲハ

カリ入ル也

一男患痔大便、痔モテハ、大便秘結スレハスグニキレル、故ニ大便秘スルヲクルシム

一男―成漏

一男―痔、ヂヤミ、其上ニ脱肛スル人也

脱肛、光虚寒ニアヅカル多シ、肺・大腸ノ氣虚シテ、脾胃ノ陽氣下陷シテ起ル

因、血熱、熱、瘡氣、風氣、暑邪、腎虚、痢病ノ後ハ、腸胃ノ全ク虚也、

産後ノ―ハ、ウマレルトキノイケミニヨル也

参芪湯

升陽除湿―脾胃ノ陽氣下ヨリ、段々陽虚ノ証ヲアラワス、治方陽氣ヲ升提

ス

自下而上者引而竭

提氣―医王加減ノ方也

補中―皆ナ升提ノ劑也

補中―

氣虚血―血―治例ヲ示ス

参木―脱肛ハ、外治ニテヲサマルコト多シ

頭痛、病ノ本幾通カアル也、本病ノアルハ、皆ナ本病ニ属シテ、其外持病ニ―スル、或頭痛ノ証

眩暈、ムカツク、風ノ吹日、或ハ雨フリマヘナドニイタム

偏正眉稜骨、又頭冷、是ハ、多クハ痰ニ属、心頭病トテ、腦ヘ寒ノ入テ起

朝發暮死、ホトリ痛、サムケノヨウナコ、ロニイタム

因、五運皆起ス、六氣相混シテ起ルアリ、脾胃氣血氣血瘀血痰火留飲、ノボセ証ノ人久―、下打撲ノ瘀血アリテ起ルアリ、帯下ニヨルアリ、

痰モ燥―湿―風―ノ三ニヨルアリ、産後ノ―ハ、血虚或瘡氣不能発者、

右諸証相混シテ起ルコト起、是ハ此門ニカギリシコトニテハナイ也

二陳―

当歸―

薰芪―調中益氣―、左右ト法ヲタテシ事ハ、氣血ヲ別ツナレドモ、今日ノ病人ニ対セシトキハ、又色々捨別アラン、カ、ワルヘカラズ、法ヲタテ、云ヘハ右ノ通也

加味―

半夏白朮―名高キ方也、痰厥ノ頭―ト云ヘハ病名ニテ、本モコモリテ居

眼累、目ガワヅラワシク、クニナル也、頭旋ハメマイ也、皆今云癩証ノ

ヨウナ証ニテ、サソイ合イ―スル也

川芎―ヨク用ル方也、瘡氣中ニコモルニモヨシ、正―ハ、頭ノマンナカ

ニテイタム也

膈熱、胸膈熱也、婦人血風ハ、血分ヘ風氣ヲウケシ也、多クボロノ〜ガ

出ル也、大陽穴トハ、コメカミ

清上瀉―マ、用方也、内熱上攻スル証也

清上瀉―是モ上ノ風熱ヲカルクチラス、左ハ血熱ト見、右辺ハ氣虚ト見テ

加減シ、正シハ風氣也

蒼耳子、瘡氣ヲ発シテチラス

選奇—ニ計リ用ル方也、眉稜骨ノ痛ハ、風熱ノ上ニトゞコリシ也、重キハ

肝火也

升麻—古昔ヨリ治例ニテ、雷頭風ノアタリマヘノ方也、畢竟風熱ニ属ス

羌呉—厥明ノ—也

芎朮—腦也

芎朮—雨湿ヲ上焦ヘウケ、且痰ガソレヘ添也

芎辛湯

補虚—氣カタニテ氣上ニ止ル、故ニ怔悸ナドノ証アリ、下ヲ補イ、シヤウ

ブニシテ、心氣ヲオサム

秫米、素問以來用、脾氣ヲ治メ、心氣ヲシツメル

安神—脾胃陽氣ヲ升提、血分之熱ヲ解ス

六君子—中氣虚寒ノ証也

小柴—肝ヲ治メ、六味丸ハ明火ヲオサム

祛風—

消風散—名高キ方也、コ、ニ色々ノ証多ク挙ク、デモノニナリ、外ヘ発ス

レハヨキニ、ヨウ発セズシテ、右ノ証ヲナス也

婦人ナドノヨウ、頭ガハレテ、カミガトカレヌト云証アリ、風氣上ニト

ゞコル也

順氣—

六味丸料、コレガマ、アル病証也、此痰ハ、ヒト、ヲリノ薬ニテハ不治也

面病、カヲノハレル、ホトル、出氣<sup>デキ</sup>モノ、出来ル、ソバカス、疥

躑ト云ヘリ、雀斑トモ云ヘリ

ニキビ、粉刺ト云ヘリ、古昔ノ方書ニハ面薬トテ、洗粉ノタグイ、或ハ

ヲシロイナドニ、キジヲヨクスル薬ヲマヂユ、千金外台ナトニ多クアリ

清上—

升麻白—面病ニハ、升麻葛根湯ノクミタテノ薬多也、陽明胃経ヲ解スル薬

ノナレハ也

升麻黄連、カヲニ出物アリテモヨシ

升麻附子—

升麻、脾胃実スレハ不能食ナレド、虚ナル故ニ能食ス、急搖ハクイシメル

也

升麻順—物黒トハ、スゞメノ卵ノ色ヲト云ヘリ、ウツグロイ

補胃—此病人マ、アル病人也、胃中ノ冷ルヲ温ム也

連翹—穀当作穀、穀—ハニキヒ、常法ニ用ユ

耳病、ミ、トヲナル、ミ、ナル、濃ツマリシテ、停耳ト云ヘリ

町(或作底) 瞻、ミ、ノアカ、カワキシモ干—ト云

耳ノ前後ニ生スルヲ、月食瘡ト云ヘリ(—ノ毒ニアウ)

痰火風ノト、コリ、酒毒、湿、痲毒上攻氣カタ、腎虚、労役、耳ノナル

ハ風熱、内熱、肝火、湿熱、上攻、痰火上攻、腎虚

耳内痛ハ風熱也、瘡病ニナルスズ也、瘡ノ治方ニテヨシ、凍耳トハ、耳

ノシモヤケノコト也

滋腎—耳ノナラヌヨウニナリテ、キコヘヌハ、モウトントキコヘヌ也、氣

ノカヨワヌノ徴也、七竅ヘ生スル病ハ、皆ナ熱氣ノ上逆ニヨル也

龍膽—左耳ハ、肝胆ノ主ルトコロ也、故ニ肝胆ノ熱ヲトル薬也

滋明—

荊芥—、蔓荊—、安神浚克—(補心シテ且ツ心ノ熱ヲトル)

枸杞ハ心肝ヲ補ウ、小草ハ(心氣ヲシツム) 遠志ノ苗也

通明—此方ナドモマ、ヨク、世間ニテ用ユ

上ノ熱ヲトリ、氣ノ鬱ヲヒラク

防通—或ハ頭瘡ノ後ノ耳痛ニ用ユ

射干散—瘟疫ノ毒ノ上ヘ升リ、病ヲナスニハ、何レヘモヨロシ

桂香—風虚トハ、肝腎ナトノ、カイナイトコロヘコモリシ風ナリ、何レ肝

腎ヲ補ワねハナヲラヌ也

芎芷—虚鳴トハ、タゞカラナリ也

犀角—是モ瘟疫ノ毒也

鼠粘—昆布、カタマリコリテハレシヲ、トキチラス、ヒカスモノ也、水熱

六味丸—上ニテハ脾胃虚、下ハ腎虚也

小柴胡—肝火ノ逆上ノ証也

地黄湯、心中不意、コ、ロニフトカナワヌコトアル也

聽事—洵トハユルコト也、ニウ童轉覚—ニウ

磁石ハ耳ヲヨク通ス

鼻病、ハナノフサガル痰ニヨル、風寒内熱氣道ノメグリノワルキ

也、黠トハミヅバナ、風ヒキテハモチロン、其他ハ逆上下痰トニヨル、

又鼻潤腦属ノモノアリ、是ハ腦中ノ熱ニヨル、酒查鼻、血熱ノ甚キ、或

ハ瘡氣也、鼻痛ハ外邪房事ノ、チ、風ヲウルニヨル、鼻瘡ハ陽明經熱也、

或ハ瘡氣、鼻茸、防通ナドヲ用ユ、鼻ハアイテヲレト、香氣ヲキカヌ、

陽明經ノ熱也、鼻ニワルキニライノスルハ、出物ノ毒ガ腦ニアル、或ハ

痰ニヨル也

通竅—

麗沢—、チヨツノト用ユ、陽明ニ風湿ヲフクミシ也、椒ハ大腸ノ氣ヲヨ

ク通ス、鼻ノ病ハ、多クハ肺・大腸ニ属ス故ニ用ユ

荊芥—胆移熱—ハ素問ノ語也

清血—

禦寒湯—一タイ外邪ノ薬也、畢竟寒ノアタリシニ用ユ、感冒門ニアリテヨ

キ方也、下ニテ咳ニキク方ハ、上ニテハ、鼻ノフサガリシヲ治、畢竟一

理也

通氣—是モ外邪ノ肺ト陽明ノ塞リヲ治ス

補中—是ハ、肺虚シテ上ニ痰アル人也、麦門山梔ニテ上焦ノ熱ヲトル、馨

トハヨキニライ也

一方、辛夷ハ鼻ヲ通ス故ニ、鼻ノ病ニ多ク用ユ

口舌—一タイ、口舌科トテ、一家ニナル位コトナレハ甚ヒロシ、

先脾熱、血熱、腎虚、心虚、明虚、火動、口中タダ痛ハ全ク腎虚、口中ニ

臭氣ノツクコトアリ、胃熱也、小兒ハ胎毒、婦人ハ帶下ノ毒、或ハ上焦ノ

痰也、或口中ハ、味出来ヲ苦クナル、是ハ上焦ノ熱膽火也、辛キハ肺虚、

甘キハ脾、酸キハ肝

舌ハレル、サケル、タゞレル、心脾ノ熱或心脾ノ虚熱、腎虚ニヨリテ舌タ

ゞレルコトアリ、何レ心ノヨワキニ、下ヨリ上ヘ升レハ

舌強、中風、脚氣、或脾胃ノ冷ルニヨル、木舌、湿熱也、重舌、舌衄舌

ヨリ血出ツ、何レモ心熱也、舌瘡、瘡毒ノヲチ入ルニヨル、或ハ心氣ヲ

勞スルモ因、又一ツ舌ノ候アリ、是ハ診察

〔唇モコ、ニテ命ス〕〔多クハ心脾ノ熱ニヨル〕唇ノ瘡、或齒唇トテ、口ノ兩

方サケキレテ、一寸トモロヲアクコト出来ヌハ、肝木亢リテ、脾胃ヲヲカ

ス、故ニ多ク青皮ナドヲ用、或ハ魚食スル人ニアリ、脾胃ニアツカル

加減涼—常法ニ、実熱ナレハ用ユ

三黄—瀉白—辣トハ、山椒ヲ食シヨウナ辛サ也

清胃—清熱—取り破テ針ナドニテ—也、是モ上焦ノ熱ヲトル薬也

瀉白—狭臍痛ハ、大腸熱病ノ徴也

瀉胃湯—

薏—風熱トハ瘡氣也、口ノソバニ、グリノガ出来ル也、外ノ薬ニテハ

キカヌ也、是非此薬ヲ用ベシ

玄参—是ハ瘡氣、心脾ノ二臟ヘツキシ也

管衆、心脾ノ熱ヲトル

清熱——アカハダニナリシ也、無皮状、脾胃虚シテ、実熱ノアル也

清熱補血——血虚有熱ノ証也

清熱凡痰——痰ト熱トガ焦ニテムセ合也

補中——脾胃虚シテ、胸隔ニ熱アル也

七味白朮——是証ハ多也、脾ノ臟虚也、脾ヲ補ナガラ熱ヲサマズ、婦人産後

ナトニモ是ラノ証也

人參理——口舌ノ熱ハ、トコデモ熱トヲモウハ非ナリ、十二五ハ虚ニ属スル

コトモアル也

四物——婦人産後ナトノ——ニ用ユ

牙齒、齒ノねガヲチテ、齒ガノビテ見ル

宣露ト云、或歴齒虫

表寒テ、口中上ヘ升リテ齒痛アリ

走馬牙疳、青苔芽疳（アヲくト濃ノ出来シヨウナリ）

清胃散——

瀉胃——凡下ニ肛門ノ病アル人ハ、必口中ヘ病ガウラガ出テクル也

当帰——風邪トハ、コヽラニテハ瘡氣也デモノ

定痛散——噉、フクミ

加味清胃——帶ニ額額一痛一者

補中——

甘露——是モヨク用藥也、胃中虚熱生セシナリ、石解ハ脾腎ノ虚熱ヲトル、

枇杷葉ハ、下ヨリ上焦ヘ薰上スル熱ヲサマズ

犀角——是モ腫物ニナルベキ毒ガ、中ニ鬱滯シテナル也、白附ハ、陽明經ノ

風熱ヲサル也

独活——是ハ、風邪ノ毒中ニコモリテ也、又或ハ出モノ、毒ニヨルニモ用

也

十全大補——

麻黄——少明腎経ノ冷ル也

羌活附子——或ハ心頭痛ニナルコトアリ

佛耳草トウゴ、肺寒テ咳ニヨシ

白芷——寒ヲ去ト、氣血ノ虚ヲ補藥也、何レ氣血トモニ虚セねハ、風寒腦ヲ

オカスアタワズ

（加味婦脾湯）舌蕈、下焦ニ瘀血アリテ、上心脾ヘ逆

眼目、一科専門ノ立テ居コトナレハ、常ト病ノ条下多シ、少ノ場

ナレト、病ノ多キハ、一身ヲヒキクルメシ、キツスイナリ、一身ノ事ガ、

総テ方寸ノ間ニト、マリテ居也、故孟子モ人焉瘦哉ニ——ト云ヘリ、故ニ

一身ニ明ニナケレハ、目ヲ療スルコトハ出来ヌ也、是ハ、眼目ニ近シ大証

也、先ツ大ダ、イハ、内障（ウワヒ）、外障（ソコヒ）ト別也、種類多キ故、

一言ハ云ワレヌ、病証名、赤、腫、澀、シバくスルコト、燥澀、痒澀、

痒痛、瞽力、リモノ、是モ——ト云、膜眵アゲシ、メヤニ、フチハタ、レルト云コ

トアリ、見ニハホツトスル物ヲ二ニ見ル、近視、トント見エヌ、遠視ト云

コトモアル、雀目偷鍼

倒睫、眼科七十二証云テ多キコト也

サシ藥スルヲ点ト云、アラウヲ洗ト云、泡ト云、蒸コトモアリ

鍼刀トテ、キレモノニテ切コト也、斧ノヨウナモノニテ、夫ニテサツカケ

テトル、是ヲ鎌ト云、右ガ治療之具也、因ハ、何ニヨラズ五臟六府一身ノ

病ニアヅカル也、本道ノヨク出来ル人ニテナケハ、出来ヌワザ也、コヽヲ

ヨクコヽロエルガヨイ也

此門ニモ、常ト出シテアレトモ、外ノ門ノ藥ヲ自由ニ用ユベキコト也

銀海精微、眼目大全ナトアレトモ、大底同シモノ也

洗肝散、風熱トハ、内ニ瘡氣アルヲ風ト云、又俗ニ云、癩症ト云モ風ノ部

也

目ハ血ヲ汲テ能見ルモノナレハ、四物湯、又出モノ、毒ヲ發散スル藥モ用

ユ、上ノ熱ヲサマス、トカク肝ノ風熱ヲ解スル薬也

滋腎—風薬、四物、清熱ノ薬也、アカクハレルハ、多クハ風熱ノ毒也

保肝—内障ハソコヒ、密蒙花、肝ヲ補也

四明—湿熱ノ上ヘ升リシ也、石決（アヤヒガラ）（ヒツねツヲヨクトル）

蜃珠ノカワリニ用ユルモノ也

祛風—烏珠痛、クロタマ、肝ノ主也

補中—緊洪、シハリツケシヨウニ、シバく／＼スル

一方—補氣補血立剂、茺蔚子、血熱ヲヨク解ス

四物—ヤハリ血熱ニヨル、血分ニ湿熱ノアルヲトル也

白姜—白朮、白キモノ、生シクル也、黄桑葉ハ肺ノ風熱ヲ去、姜蠶、肝ノ

鬱ヲハラス、旋覆花、肺ノトゞコリヲ除ク、粉艸ハ甘中も

犀角—験、マブタ、小皆ハマヂリ、大皆トハマカシラ

受風（ヒトミ）食毒、白附、風氣ヲ去

蔓荆—黒水、内膜瑕盤（ヒ）、リノ入シヨウニナル也、七十二証ノ一也

天門冬—眼睛不能—、病ニヨリテ、ヤブニラミノヨウニナル也、風ガ目系

ヘ入レハ、右ノ証ヲナス也

加味—不（ニ）甚—堅硬—者

眼陽—眼発—、ナフリテ後、風熱ノマタノコリテ居ル証也

益氣—全ク脾胃不足ヨリ起ル也

脾胃ノ陽氣ヲヒキアゲ、血熱ヲ去也

神効—尤モ目ノ薬ナレト、シヒレナトニモヨシ、腿モ、

羞明、マバユイ、皆ナ肝虚ニ属スル証也

六味九科、虚腎火動ノ脉也、索途トハ、テサグリニテユク也

十全—氣血トモ虚セシ也、緋熱ハ、マツカニシテ熱スル也

咽喉、十八証トテ、十八色也、痲腮（エトハサンバユ）、是ハ温疫

ニヨル、風熱ニ痰ヲ添ル也、少明証ニヨルアリ

血虚シテ、血熱出来テ—氣—氣、瘡毒痒、七精ノ氣カタニ痰ヲソエル、  
通例風熱ナトニナル也

清涼—風ヲ去ト、瘡氣ヲ去ト、血熱ヲサマスノ薬也

加味—肝腎ノ明氣、虚シテ逆上スル也、ソレヲ下ス薬也

驅風—通例ヨク用薬也

滋明—

清上養中、脾胃モトヨリヨワキ人也

通関—明証ノ傷寒ナトニアルナリ

牛蒡—驅風解毒ナド用テモキカヌ、専ラ内ニ熱ノツヨキニ用ユ

射干—ヤハリ温病也、馬瘡、熱ヲサマシ、コリシ毒ヲトル也

馬芽硝、芒硝ノ類也

拔芋—桔梗湯トノ、桔梗ノナキハ、ヲチシモノト見ユ

荊—風テ咽ノハレシニ用ユ、軽キ薬也

黄芪—肺氣虚シテ、中ニ血熱ヲモチテ起也、虚勞ナドノ咽喉ニ瘡ヲ生セシ

二用

結核、皮ノ下ニグリく／＼ノ出来ル也、多クハアゴノ下、或ハ腋下、

或ハ臂ニモ出来ル

因ハ、多ク痰ニヨル氣鬱、疝ニヨルニハ三和散ヲ用也、或ハ蟲積ノアル人、

強府湯ナトヲ用ユ、小兒ハ疳ニヨル也

梅核氣、癭瘤ハグリく／＼ナレハ、大キカ小ナルカデコソアレ、同コト也

氣力痰計リナレハ結核也、血熱ヲ挟メハ瘰癧トナル也

青藤—

消口—四液トハ、手ノワキノシタ、並ニモ、ノツケね

□消（ナカニテチラスト云コト也）—太陽少明、手ト二經ノ風寒ヲケス也

開鬱—マ、アル証也、ヨク覺テヲクガヨシ、痰ト鬱トニ因ル也

一方、コリカタマリシモノヲチラス、海帶、アラメノタグイ

加味四―梅核氣ノ常法ノ藥也

消腫―

(二丁白紙)

○肺癰、咳ヲ長クセク内ニ、後々膿血ヲ吐也

湿熱ヨリ起ル也

黃芪ノ入ル藥多也

○肺痿、肺ノ臟シホミシヨウニナル也

桔梗湯―

薏以―百部ハ、肺ノ臟湿熱多クシテ咳シ、或ハ虚勞ノ証ナトニヨシ

參朮―

參朮―肺癰ノ証ハ、多ク脾氣モヨワリテ居也

紫菀―

桔梗湯一方―

心痛―(山梔子ヲ多用)、鳩尾、コケツ、上腕ニテ痛ヲ心痛ト云、

即チ胃ノ上腕ヨリ心臟ヘツミキテ居、ソコガ痛ム故ニ胃脘痛トモ云也、

或臆中アタリニテ痛モ心痛ト云、又下マデモ痛メハ、心腹痛ト云也、ヒハ

ラヘマテサシ痛メハ、心脇痛ト云也、右ノ様子ヲ、今ノ医者、ムサトワ

ケズニ療治スルトハ甚タ非也、鳩尾ト巨闕ハ(心ノ大キナ門ト云コト也)、

心ノ臟下垂シテ、心ノ領分トナリテ居也

因、寒、熱、氣、驚キ、蟲、暑、痰火、虚勞、癰痛、胃熱、脾胃虚、瘀血、

痰飲実結シテ、結胸ノヨウニ痛アリ

姜桂―寒アタ、ムル藥也、香少し、平胃加減

清熱―

清隔―是モ痰火ニヨリテ痛也、肝火ニ痰ヲ兼シ也

枳縮―

芎朮―一方―、是ハ疝氣升リテ痛ヲナス也、小腸氣ト云ハ、ヤハリ病名

也

清上類、鬱金、氣血ノ鬱結セシヲチラス也

一方―梔子鬱火ヲオサム也

枳実―流血―、辛キモノヤ、酒ナドヲ飲テ、胃□熱ヲ生スル也

蟠―膀胱氣、小腸氣、腎氣、三ノ病名也

四味鳥―是ガ鳥沈湯ノトテ、ヨクツカウ藥也

氣ノ胸サキヘ、トゞコリシヲ治ス也、四味トモ氣劑也

連附―熱因熱用也

腹痛―バヒロ也、腹筋トテ二本ノ棒ノ痛ナト也、因、寒、胃虚、

心虚、肝火、疝積、瘧毒、宿食、瘡氣内攻、ツリイタムハ打撲カ、肝火

ノ虚カ、胃虚カ也、ナカフク痛

内ニ湿熱フリテ、外寒冷ニヨウル、也、右ノ証多シ、始メハ、脾胃ハ虚

セネトモ、久キウチニ虚スル也

開鬱―六鬱湯ヨリクミ出セシ方ナレハ、開鬱―ト云也、一切トアルカワリ

ニ、色々ノトコロヘ手ヲマワシ方也

散火―全ク鬱火ニヨル也

香砂―活血也

加味□氣―瘀血―、打身ナトニテ、内ニ瘀血ハリテ起ル也

五積―

神氣―何氣方ニテ内熱出来シ也

神□―通例ノ腹痛ニ至極ヨクキク、ユルメル、アタ、ム

理中加呉―今ヨク用、是症ニ寒ノツキシ也

黃連義―一タイ肝火ガ飲食ニ虚セラレ

腰痛、因、風氣、中風ナドノ風也、外邪、疝家受、寒湿、湿熱腰ニ

トゞコル、七精ノ氣、痰、宿食、打撲、瘀血、産後、腎虚、勞役、疝積、

血氣俱虚、小兒ハ蟲積、チカラナクイタム、ツリ―、重―、シクノクサ

スヨウニ

養血—腿<sup>フトモ</sup>ハ、腎ニ熱アレハ腿—ス、癩毒ノ後ニ、下部ノ筋カワキ痛ナト

二用ユ

当帰活血—血分ニ熱アリテ痛也

調榮—腰内<sup>セシ</sup>ハ、クヂクコト也

二陳—湿痰ノ——ニハ常法也

清熱—是モヨク用、脚如沙墜、スナノアルトコロヲアルクト、ズリサガル  
ヨウナコ、ロモチ也

補中益氣—破故紙、コシノ中ノ陽氣ヲアタ、ムル也

人參—中風ガ、リシ腰痛也

独——、瘀血ヲメクラシ、湿熱ヲサル薬也

脇痛ハ、先肝積多シ、怒火肝積ノ瘀血、或寒<sup>ヒヤ</sup>、痰<sup>ヒレ</sup>（懸飲）、七情、

湿熱、疝

疎肝—皆ナ瘀血ト肝積証也、○推氣也、左右ヲ、カクワケテハアレトモ、

一ガイニモユエヌ也

柴胡—

平肝補—肝火タカブリ、脇痛ニヨロシ

一方、胸背走痛ハ、脇痛所ニハ出マヂキナレド、トキク、ニ脇モ痛也

六味丸—腎虚シテ、肝木ノタカブル也

臂痛、此内<sup>ウデ</sup>へ臈痛<sup>サンノウケ</sup>モ入テアル也

因、寒湿、血中有湿熱、風病、寒入<sup>ヒヤ</sup>テ氣カタ、蟲積、痛而不能举者、血虚

也、或打撲、痰

二木湯

蠲痺—姜黄、トカク手ノ痛ニ用ユ、氣血ヲ補薬也

滋榮—血分ノ湿熱ヲトル薬也

烏順—類中風ノヨウニシテ、臂痛スルニ用

肩背痛、痰、外邪、風寒、湿氣、瘧毒

湯治ニテ浴湯ニアタル、是全ク湿也、先氣カタト痰オ、シ

（二丁白紙）

氣血虚モアル

参合湯、三方ニセシ方也、氣痰風ノ三ノ治ヲ一ニス、二陳、烏順、香蘇

大陽経ヲスカス、肩ノツマルニモヨシ

通氣—大陽経、肩背ニテ塞シヲ治ス

豁痰—是モ湿熱ニヨル、湿熱アレハ痰生ス

海桐皮、多ク手ノ病、イタムニ用ユ

是肩—強直、机ヲカヅキシヨウ也

痛風、何レ痛バガヘシテ痛也、一ト、コロヒノカワラズ、或ハ上

手ニ一片位カワルハ、痛トハユヘヌ也、是等ハ素問ノ痺ノ病也

白虎歴節痛甚也

上ノ方ニテイザルハ、専ラ痰、血熱、肝火

下ノ方ニテイザリ痛ハ、下部ノ湿熱ニヨル

風寒湿、風寒、暑湿、久湿、氣カタ、留飲、酒毒ノ湿熱、血虚加痰、労役、

外邪

表邪ノアルナシヲ、ヨク見テ治ヲホトコス、表症ハ寒熱アル也、裏症ニナ

レハ、タトヘ熱アリテモ液発ス、大小便ニカマウニ至ル

外邪ヲウクルモ、内ニゲテアル故也、内傷ノ生スルモ、外邪ニ初メハヨル

也、痛風ハ、多クハ内外トモニ病也、故ニ治シガタシ

故方ニモ、カルキ痛風ニ用ユ薬ト、重キ薬ト載テアル也

羌活—、□表人全ク表邪ノ証ニ用ユ

加味五積—陽氣ノスクナキ人、寒ガ骨ノ間ニ入ル也

山甲麻香、骨ヤ筋ヤ節々ノトコロニ、カヅミテ居痛ヲク、リアルキテ治ス

清湿―

□経活―是ハ、病証ハ痛風ノヨウナ証ナレト、主ハ虚血中へ寒氣ヲウケシ也、龜板ハ、久キ痛ニハ大キニヨクキク、姜汁、酒ニテ浸シテ、ヨクツカウ

靈仙―多クハ、痛風ハ腫ヌケレド、此ハレハ、白クシテハレル也、湿バレ也、腫タトコロ赤キハ腫物也

□筋―乳香没薬ハ、痛トコロヘハツミ、痛ムトコロヘアツマル血ヲトル也

一方回、是モ血分ニ風湿ノ入テ痛ヲナスヲ治スル薬也

後一方回、是モ同シ血分ノ熱ナレド、下ナレハ湿痰ヲトルヲ主トス

活絡―血ヲメクラシナガラ、風湿ヲトル也

麻黄―

犀角―、三陽―結陽、素問ニ出ツ病名也、瘡氣経絡ヘソ、ギシ也、出物

腫物ノ毒ヲトル主ノ薬也

趨痛―趨、アトヨリオウコト也、韭白破ヘニラノシロミシ、瘀血シテメグラ

ス

消風―コノ薬ハ、少シ疝氣ノ方ヘカ、リテ居ル

玄胡、氣血ノトゞコリヲメグラス、藜朮、血熱ヲサマス

羌活―血分ノコヽトゞコリシヲ治ス

骨碎補、補肝腎二臟、骨節々ノ痛ヲ治補也

桂枝―烏頭―、ゼンタイ脚氣門ニ出テ居テヨキ方也、カラダ中痛ニ用テヨ

キ也、故載ス

六味丸料、腎虚ニ肝火ヲ加テ居ル病也

脚氣、発端、時無テハヤル病ト、又サホトニナイヨウニナルコト

アリ、六朝ノ末ヨリ唐ノ頃マテ、トホウニハヤリシモノデ、是カ今行レル

―ナ也、其頃ハ風毒脚氣ト云テアル、千金外台ニ評也、宋代以来ハ、只

今ノヒザ―ト云ヨウニ、凡痛風ノヨウニ□ハレタリ、或赤クナリテハレタリスル也、右ハ宋明ノアタリノ脚氣也、唐ノ代ノト脚氣ニチガイハナケレドモ、衝心ナドスルコトハナイ也、近來ニ至テ又日本ナドニ、盛ニ唐ノ代ノ脚氣多也、天正アタリ道三牛山時分ニハイカウナカリシガ、天明ノ頃ヨリハヤリ出セシ也、今代ノ脚氣ニ、宋アタリノ回春アタリノ治療スレハ、シミタレワルイ也、ヒザ―ト云ヨウナノニ、唐ノ代ノ治ハスルドニテワ

ルイ、右ヲヨクコヽロヘルヨシ、方彙ノ時分ニハマタ宋明ノ―ノ方多シ○ヒザ脚氣、湿、風、寒、瘀血、腎肝不足シテ血虚、腫物ノ毒、アシノスヂニコモル疝氣

○外台千金、腎ナド虚シテ居人、足ノ三明三明ニ風湿ノ氣ヲウケル、足ノ

経脉ヲツタヘ腹ヘ入也、足ハサホド痛マズシテ、不仁シ痿スルナドシテ居

ルウチニ、腹ニ入テ、其段息アラク□キノホセレハ、夫ナリニテ死ス、腫

ノアルヲ湿脚氣ト云、ハレナキヲ乾―ト云、是ハ、明ノ代ニテツケシ名

也、陽経ヲノボルハ―ノ表証也、明経ヲツタヘルハ裏証也

毒ノ多キ―ト、其人ノ虚弱ナノカツ―トヲワカチ、治ヲホドコス、悪

寒発熱ナトスルハ表証、嘔吐ナドノヨウナ、腹ノ中ノ証ハ裏証也

今ノ代ノ人、水腫病ヲミタリニ水種病ト云ハ、甚ワルキコト也、死ヌルト

キニハ、何レムナサキヘサシコミ死ナリ、自ラ弊ヲオウコトハスマジキコ

ト也

羌活―是宋明ノ脚氣、今ノ代ノ脚氣ニ用テワルイコトハナケレド、シミタ

レテワルイ也

当帰―下部ノ湿熱第一ノ証也、薬方モ其コヽロヘノ薬也

人参―是ハ、今ノ脚氣ニ用テモヨキコトアリ

五積―

四物―是ガ今衝心スル証也、畢竟衝心スルモ、血熱ノ衝心スルナレハ、右

ノ方ヲヨク今代ニテモ用ユ、ヨクキク也

防已―

補中益―

檳蘇―是ガ今ノ―ニヨク用ユ、腹ノチトバカハルヨウニナリテ来リシニ

ハ、是非用也

□腹―此方今ノ―ニ用テ、スイブンヨシ

烏藥―脚氣ニハ、頭目ノ眩暈スルコト、是非ソウモノテ、シカシ毒ノ甚キ

ハ、補劑入テアル故用ラレヌ

六物―是ハ寒湿サヘトレ、バヨキ―也、内ニ血熱ナドノナキ証ニ用ユ

加味―明ノ時分ニ云、アシノシヒレルナトノ証ニ用ユ

八味丸―ホントノ―ノ虚寒ノ証ニ用ユ

茱萸―是ガ今ノ代ノ―ノ衝心ニ、タレモヨク用ユル薬也、木茱湯トテ、

今ニ味バカリモ用ユ

檳榔―今代ノ医、童便ニテ檳榔ノ一味、或ハ犀角一味ヲ右ノ粉ヲ用ユ

沈香―

疝氣、古人ノアタリマヘ云ハ、痛ナケレハ―トハ名ケヌ也、小

腹ヨリ牽丸ノアタリニ氣トゞコリ、ツリ痛ヲ―ト云、今ハムサト疝氣

ト病ノモトニテ云ハ非ナリシ、一タイ疝ノ字ハ、イタムトヨム字也

七疝五癰

風寒、暑湿氣、肝腹ノ宿食、瘀血、脾胃虚シテ、腎虚ヲ来シ―アリ、

腹ニカタマリ出来シヨリ疝積ト云

中ニ湿熱ヲモチテ、外ヲ寒氣ノヲウ故ニ発スル也、治療、寒ヲ散スト、

中ノ湿ヲトルトノニスヂアリ

盤腸、膀胱氣、偏隧氣、大腸氣、小腸氣、子宮脘、木腎

神効―益智、臍ノ下ヲアタ、ムル

烏苓―、ヨク用ユ、無問トハ、センギニハヲヨハヌト云コト也、氣カト、

コレハ、血モ食モ水モトゞコル、通氣主ナル故、方ニ目ス

行氣―腹内ノ氣ノメクリノワルキニ、何病ニ用テモ功アリ

和氣益榮―中ニ血氣不足シテ、疝ノヲコリシ也

五積―○加減香苓―、○川縛―(疝ノ湿熱ヲ去)、青篋(西戎ヨリ出)薬ヲ下

ヘサケル、苕橘核ハ、カタクコリシモノヲ和ク

一方、小腸氣モ疝ノ中ニテヤハリ小腹ノ痛也

白葱散、大治トハ、手ビロク治スルト云コト也、是血虚ノ人ニ用ユ

血刺痛兼血臟

聚香飲子―○加減柴―、是モ疝ノ湿熱ヲトル薬也

十味蒼珀―寒ニトチラレ、氣血ウチニト、コリシヲトル薬也

氣疝飲―脾胃ノヨワキ人ガ、肝ノ方ヨリシマリシニ用ユル方也、木克土ト

克セヌヨウニセシモノ也

立効―○桃仁当帰―

当帰四逆―熱醋熏炙、スヲニヤシカゞシテ、其香ニテヨウノノ氣ノツク也

痿躄、血氣トモニ虚シテ、湿熱ヲモチハ―トナル、血カワキ、

其中ニ湿熱ヲモチハ、逆上ニ因リテ起ルアリ

癥毒、痰、何レニモ下ガ不足シテ居ル故ニ起ル也

四物湯ニ、湿熱ヲトル薬ヲ加シ薬也

清燥―是ハ、東垣ノクマレシ方ニシテ、ヨク用ユル也、胃ノ氣上ヘ發達セ

ズシテ、下ヘ湿熱トナリテ、ダリサガル也

皆血氣ヲマシ、下ノ湿熱ヲトル薬也

大防風―

藿香―、脾胃ヲ専ラ養薬也

葶澄菜トテ、脾胃ヲアタ、メ、疝ノ方ヘモキク、シマルトコロヲ發スル

モノ也

ナキトキハ胡椒ヲ用ユ、コシヤウノ类也

藿養胃―

加味四物―

消渴、カワキノ病也、素問ニハ消中ト云フアル、三ツアリキ、上

《渴甚シ》、中《食ヲヨク食》、下《小便トホウニ出ル也》、焦

中ノ湿氣《猪苓湯五苓散ヲ用証也》、其湿ヘウルヲイヲヨブ也、内燥トハ

引杏

救ナドノ証、内湿カ内燥、熱ガヲモカ

腎虚シテ、湿熱アリテ脾胃ニ湿熱、心肝ノ湿熱ト別ル、小便ガ濁ル、口

中ノ甘キナト前兆也

黄連地黄

黄芩湯―中ヲ潤シナガラ、肺火ヲサマスマス藥也

人參白朮―

滋明降火―粉葛トハ常ノクツ也

門冬―心熱移於肺トハ、素問ノ語也

參芪朮―生脉ニ黄芩ヲ加、肺ノ方ヨリ金生水ト腎ヲ補藥也

天―糯米肺氣ヲ補

加味錢―脾胃虚弱ヨリ起シニ、サシヒキシテ是非用也

生津甘露、血分ノ湿熱ヲトル方也、食ヲタベテモ、却テソレガ湿熱ナリテ

シマウ也

枹杷子、肝腎ノ血ノカワキシヲマシ補也

黄芪―

瘰癧病、―ト云病ハ、背ソル病也、背ノソルハカリニテハナク、手

足ノリキミノツキテ来ル、或ハ咬牙ナドスル病ヲ、癰症ナト云ハ非ナリ、

ヤハリ瘰癧病ノ内也、脾氣不足シテ血虚セシニヨル、因、何レ痰ヲソヘテ

居、何レ癰症ノ一列ノ葉也、発汗過多、金瘡、産後、或ハ小サキキヅニ

テモ、瘰ヲナスコトアル也

參―八物加減ノ藥也

小續命―金匱ノ通り病痛ヲ出ス、何レ瘰癧病ニウチツケノ藥也

調經、婦人ノ病ノ何レ經水ニヨル

病ガ別ニアリテ、經水イニソワヌヨウニナリテ来ルコトアリ、經水ノ不ト

ノイニテ、病ガ起コトアリ、別ニ病ノアルハ、別門ノソレノ病門ニ

ヨリテ療ス

外邪、氣鬱、食宿、胃熱、湿痰、積心勞、下ニ湿熱アル、勞役、經水一

マキノコトハ、此方後ニクワシク挙テアル、故ニヨク念ヲ入テ誦ヨシ

妊娠、《久キヒヘアリテ》宿冷、將理トハ養生ノコト也

方考、当アタ、メ血ヲマス、川ハ氣ノ血中ニトゴリシヲメクラ、白芍、

涼シテ熱ヲトル、地ハウルヲシテ血ヲマス、錯經トハ、經ノメクルトキ

ニ、上ヘ吐血シタリ、衄シタリスル也

葵花、コシケノ湿熱ヲトル

腑臟秘澁トハ《ハラガト云ガコトシ》、大便秘スル也

加減五積、コノ方甚タヨクキク藥也

粉草トハ、甘草ノコト也

加減四物、血ノ動コロニ生冷ヲ食シ、血中ヘヒヘヲウケ生ス

逍遙―柴物ニ麦門ヲ加シモノ也

浴身、浴門、猶言固身

紅花当歸―ヨクアルコト也、多産ノ婦人ニ

大温住―或経損孕トハ消産也

滋血湯、ヨクアル証也、虚勞ニモナラウカト思証也

馬鞭草ト云モノハ、フルチヲ去ル、且フルチヨリノ水氣ヲ利ス

烏藥―血海疼痛トハ、ムナサキマデ痛ム―ト云

妊娠

旋覆花―是ハ惡阻ニ多ク用ユ

木通散、専ラ氣ヲメグラス、香茱ハ香薷也

小産、コロブ、腹ヲツヨクウツ、飲食ノ毒ニアタリシ、又脾胃ノ  
ヨワキ人、氣血ノヨワキ人、或シタチ持病アル人、先ツ小産シソウナレ  
ハ、氣血ヲト、ノへ脾胃ヲ補也、又小産スレハ、アトニテ何レアタリ出  
来ル也、ホントノ産ヲ大産ト云ヘリ、ソレトハ小産ムツカシ、フルイノ  
来リシナトハ死証也

芎歸補中、是ハ、氣血トモシク、小産シソウナトキニ用ユル方也

産育、婦人ノ産ムシロニ入シヨリ、ウミヲトセシマデヲ、——ト  
云、催生<sup>ひやま</sup>ノ藥ハ、婦人ノイケミノ来リシナトニハ用ユレトモ、メツタニ  
ハ不用也

産ノムツカシクナルハ、脾胃ノ陽氣ノカイナク、腹ニハリナキ、或ハ痲  
症ノ婦人ナト、産ヲ恐レテシマルナト、或水ヲ早ク見、産門ノカワクナ  
トニヨル

益母草ハ、氣ヲメクラスト、水ヲ利スルト、鬱氣ヲヒラクトノ証ニハ必ス  
用ユ

脱衣散、二度メニハモウ氣ノハリノナニニ因ルアリ、又濕熱ニヨルアリ、  
又胞中へ水ヲフクミハルモアリ、通例ハ五積附子加減、芎歸湯桂ヲ加、  
或雲母一味ヲ用ユ

乳病、(病)チ、ノデヌ、コレニモ虚実アリ、アマリ内ノ実シテ  
居テ出ヌアリ、血虚シテ不出ヌコトアリ、氣結シテ出ヌコトアリ  
右ヲ出スヨウニスルヲ、下乳ノ方ト云ヘリ

乳核、吹乳、吹奶<sup>チ、ノコト</sup>、小兒ノ口へ含テ、口熱ヲ吹ト云ヘリ、アナガチニ吹バ  
カリデハナイ、女ノ手前ニモ、氣血ムスボリ発スル也、乳癰——岩ノ名目  
アリ

一方、一方虚ニ属スルト、実ニ属スルト二条ヲアク  
花粉ハ、乳ノ熱ヲサマシ、チ、ヲ通ズ

王不留行、チ、ヲヨク通ス

木<sup>マ</sup>徹<sup>マ</sup>実子、イヌゴノ如キ、コリテカタマリシモノヲトク  
回乳トハ、チ、ヲトバメテシマウコト也

麦芽ト云モノハ、乳ヲ血ニ入シマウ、故ニ有子ノ母、乳母ナドハイムコ  
ト也

丁香天漿散、天漿ハチ、ヲ云也、丁香ト云コトハ、明医方考ニハ出テ居デ  
アロ

搭、カケル

当歸補血、産後無乳ハ、氣血トモニ虚セシ也

乳癰

牛房子湯、膿ヲマダモタヌ先ハ、是非用藥也

十六味——虚証ノ人ノ乳ノ病ニハ必用也

臥頻服トハ、何ソ臨時ナトアリシナラン

婦人諸病ト云へハヒロキコトナレド、婦人ニ多キ病ヲコ、ニア

グ

茯神散ノ証ハ、心ノ臟ノ陽氣不足シテ、明氣ガ是ニ乗ゼシ也

菖蒲散、下焦ノ濕熱ヲヲウ藥也、ヨクキク藥也

海粉ハ、カルイシノコ也、痰ノコリテ居ルヲヨクチラス

小便出尿、是ヲ交腸病ト云ヘリ

唾科、小兒ノ異血ヲ唾ト云、(小兒科)小方脉ノ初生ノ病、驚風類、

五疳ノ痘疹、大程治例此篇中ニアリ

急驚風、ヲドロクガ主トナリテ起ルアリ、瘡氣心肝ノ二臟ヘヲカ

シ起ルアリ

上癩ハ目ノ上ヘカクレル也

加味敗毒、肝臟ノ風ヲ去、風痰トハ、ヒキツケヲサセル痰也、驚痰トモ云

南極寿星——

抑肝散、白木、苓、木克土ト乗セラレヌヨウニ脾胃補也、当、川、肝ノ筋ハ

サキヒツハルヲウルヲシ、ユルメル

釣藤ハ、肝氣ヲヒキタテツリ上ル也

脉紋、虎口ノ三クワントテ紋ヲ見ル、(ミタレシウヲノホネノヨウナ)乱魚

骨、汨瀉トハ、米ノカシ、ルノヨウナモノ、下ル也

参木茯苓湯、抑肝散ヲ用ル証ノ中ヨリエラミ用ユ

慢驚、——ハ、ヌルケテヒキツケル、ヒキツケテモ、ヒキツケタカ、

ヒキツケヌカノシレヌヨウナ、故ニワルスルト、ヒキツケハ、カルイナ

ト云テ居也

吐瀉ナドノアトニテ、脾胃ノ氣ヨワリテ、肝木ノ氣亢リ起ル也、脾胃ト

ハ、ベツタリトヨワリシ也

此証、目ヲ半眼ニアキテ寢入テ居ヤウナ也

醒脾散、ヲサダマリノ方也、トノ方モ人參ヲタノマナ、ラヌ

咬牙床、牙床トハ、ハグキノコト、柚製

変蒸トハ、今俗ヨウヲスルト云コト也、熱ガボカノシテ、フンガ色ナド

モカワル也、ヨト云ノアヤマリ也、或説又今モ夜トギト云コトヨリ来ル

也

烏沈湯、常用スル烏沈湯ニ非ス、此門ノ——也

疳疾ト云ハ、小兒デハ一チヒロキ病也、大人ノ勞証也、五疳トテ、

五臟ノ疳アリ、此五疳ノ証ハ、ヨクワキマヘねバナラヌ也

(心ノ中)驚疳、眼——、食——、乳——、肺病中氣——、鼻——、腎ノ属走馬——、

乾——、喝——、瀉——、膈、疳ノ字ヲ上ニツケ、下ニツケシ病多シ、何レ

脾胃ノ虚ニ、湿熱ニヨリテワルキ虫ノワキシ也、疳トハ、ムシバム也、

是ノ虫ガ伝死病ナド、ナル也

心下、腹、臍、臍下、水腹、胸、脇、胸下

其下ニツク痞、満、結、急、痞鞭

(ムシバムト云義ヲ、シバウモチテ居也)

疳食瘡、疳白トハ、ニゴリシラジヤケル

消疳飲、前条トハ、重クナリシニヨロシ

九味柴胡湯、名高キ方也、肝経ヘアツカル湿熱ニ、皆因ル証

蕪荑仁ハ脾臟ノ虫ヲ殺ス

生熟地黄——肝服ノ方也(疳服ノ療治ハ至シヌクイ)、多ク如意ノ薬也、重キ

ハナヲラヌモノ也、蝦蟇、専ラ虫ヲ殺ス

主客、証ノ前後ニアラワルヲセンギスル

微熱微渴トハ、氣ノツカヌ位ノ熱渴也、少消ト云ヘハ、スデニ無、反(テ

ルマシキニアル)、不微(アルベキニナキ也)、古ノ字ナドハ証ニヨル、目ア

ケ

#### 4 医学講義録

皇文政三年歳在庚辰五月七日夜開講

是ハ、全躰ノ発端、去年述シ故ニノヘズ、追々申ストヲリ、百病ノ治例ヲ

知ル本也、一タイ方ヲサガス為ニ作リシモノナレト、今講習スルトキハ、

治例ヲ知ルタメ也、凡何ノ書ニテモ、此意アルコト也、易ナトガ已ニソウ

也、孔子モ繁辞伝ニ述テオカセラレタ、別アル也、病門ノ目錄ナトモ病名

病証(内傷皆氣ナトノ类)、病ノモドヲ以テ立シモアリ、補益門ナトハ、治

療ノ法ヲ以テ目ス、調経ナトモ然リ、是ハ万病回春ナトモソウ也、中風ト

ヲ云証、傷寒ハトヲ云証、ト云ヨウニシ、病ノ本ニナリ起ルトコロヲ覚ル

ナトハ、皆病命ノ学門也、世間一トヲニ、病命ノ学門ト云コトハナシ也、

夫ヲ知度ナレハ、回春、正伝、入門、手広ニスルトキハ、準繩ナトヲ学ヒ、

其上百病ノ治例ヲ知ナレハ、学問ノ順也、治例ノ中ニモ、百病ノ治例ト、

(傷寒ノ例ノ字面)証治ト云コトトアル、コナタノ家ニ、随証門ト云モノ一

卷アルガ、是等カ即証治也、尚又方考ト云コトアリ、一方ツ、クミ立テアル、主意ハタラキテ推考ヲ方考ト云ヘリ、是モチカマワリノ方ヲ三四十方モスレハ、推シテ他ハ考ラレル也、カヨウニ申シ立ツレハ、ムツカシキヨウナレト、サマデムツカシキコトデハナイ也、病倫藥姓方考治例ト云コトハ、手近キ学問也、右ノ条ニハ、コナタノ家ヘツキ学セねハナラヌコトト、兼テオホエテヲカレルガヨイ也

サテ此方彙モ、道三家ノ意ヲウケテ作りシモノナレハ、其流其人ノクセナドモアルモノナレハ、一向ニ是ニヨリ、モタレラレモセズ、足タト云コトニテモナイ也、先ツカリソメニモ、是ニヨリ師家ノ治例、其家其人ノ仕来リノ治例ナトモアルナレハ、取捨スルハ其人ニアル也、病門モアルヘキガナク、別タイテモヨロシキ病門ヲ別チ、且又丸散ノ方ガナク、且又道三家ノ流ニヨリシモノナレハ、古方ガ一向ナイ傷寒金匱ノ方ナトモ載オキ度コト也、夫ダケハ、是非出カサねバナラヌ也、夫ハ、自分ノ手ニテデカスガヨイ、長者ノサシズヲウナスベキ也

中風、病本ヲ以テ病名トシテ一門ニ立也、夫故ニ中風ト云ハ、トノヨウナ証ヲナスト云ヲ知ルガ病命也、起ルワケ、本ヲモオキねハナラヌ、氣虚、血虚、勞役、疾、酒毒、内損、腎虚ナト云ヨウニ、吟味セねハナラヌ也、治法ト云テ、タトヘハ順氣スルカヨイ、祛風ノ劑化痰、或ハ内ハ大盛ナレハ、降火ノ劑ヲ覺ヘルヨウニスルヨロシ、或ハ順氣活血ノ劑ヨロシト云コトヲ覺レハ、藥方ハ自ら其中ニアル也、是ヲ各病ノ治法ト云也

發端、ツイテナレハ、コ、ニ申シノブ、スヘクマテモ是ノトヲリ也、是等ガ、学問ヲシテユク注文ヲ云テキカスノ也、サテ通俗トナヘル病名アリ、古書ナトニ格別ニ命セねハナラヌコトナレハ、是ハ、委中風ハトヲ（中風ハトヲ云証）ナト云ヨウナコトヲ知リオカねハナラヌ、是ヲ知ラねハ、病ノ名目ガツカヌ也、学則ノ名目ヲ申シキカス也

三省飲通用ツカウ也、キツケ藥也、痰ヲヒラキ破也、痰厥ハ痰ニテフサ

ガル也

陳風湯、通用ノ藥方ハ、トカクハラニテ、五六十方ナトモ覺テオクヘキコト也、是等ハ、氣ガト、コリ、血カト、コリ、寒ト、コリナトセシニ用、四物ニ練氣劑

撰生―熱ノ多キ病人ニハ、必用ユマチキコト也、物ノ為ニ、人間ノ陽氣ノトヂフサガラレタルヲヒラク也

鳥順、理氣トハ、ワキミチヘメグル氣ヲ、本スズヘナラス也、順氣ノ藥、イツモコウイウ藥也、氣ニハ、上ヘ升ル氣、下ヘ降ル氣ヤ、イロク、アル也、ソレノ逆セシヲ順ニスル也、強蚕、肝氣鬱シ、ムスホレシヲトキホドク、枳壳ハ、ハラワタニ氣ノウツシ、コモリシヲヒラク也

以下ノ加減ハ、此方ノ病証ニ添ヘキ病証也、此条ノコエダノヨウナモノ也、凡加減スルハ、主ニナルモノニアシライヲツケル、食物ニアシライヲスルヨウナモノ也

以下ノ病症ハ、此本ニテナル藥ナレト、其不足ヲ補也、合方ハ、加減ノ大ナルヨウナモノ也、コノ加ヘテ行藥ハ、此方ノ藥ニ縁ヲ以テ加減スルコト也、モノ見ケンブツノ場ヘ、ソトヨリハイルニハ、チツキナケレハハイレヌ也、天麻ヘ強蚕ト木香ガ、枳壳ナト云ヨウニクミアイユク也、スヘテ縁アル也

遍身疼―ハ、加減ニテ推シテ意ヲモトムレハ、血ノメクラヌヨリ来シ也

背心痛ハ、氣ト痰ト外邪ヲ兼テフル也

五加皮、足ノ方、ヨクキクモノ也、角茴、腎ノ陽氣補也

細茶、ヨキチヤ也、血風ハ、一身ヘホロクノフクミシ也、血分ヘ外邪ヲフクミシ

（氣実ニシテ此証ナレハ鳥順ヲ用ユ、氣虚ナレハ此方）○中風面目十―是ハ別ノコトナレトモ、中風シビレ萎ニハ、多ク本方ヲ用ユル故ニ、コ、ヘ此方ヲ挙也

八味――

滋開――中風ニ大便ノ閉結スルハ、モチマヘ也、イコウ甚キニハ此方ヲ用也

愈風――道三ノ時節ニハ用タレトモ、今ハイコウ不用

初中、中風ノハヂメノセツ也

病ノ七分トヨリナヨリヨシ、上ニテ調理スル也、ヒツキヨウ人物湯加減也

養榮――省風――癩症モチダシノ中風ニヨロシ（中風門ニ似薬多シ） （疝気ヨリ起ルモアル也）

南天蟬蛻ナトアレハ、癩ヲカネシニヨロシ

清痰――三化――唇緩カ此方ノ目アテ也

道痰――痰ニヨル中風ニ用、癩タチ痰ヲ添シニ用也

氣カ得テ、セワシクナル、イラチキタルモノ也

痰カ塞、氣ムスポレハ、自ト逆上スルモノ也、痰ガトレル故ニ、カゲニ

テ逆上ガナルト云コトヲ知ルガ方考ノ工夫也、ヲサヘツケラレタヨウ

ナ氣ノスルニ、両ギ、ニキク也、是ハ――ノ余力也

合方モ痰ガ主ニナリ、夫ヨリ起ル諸症也

加減――氣血トモニ補ソウシテ、痰ヲヒラキユク也

薬性ノ外ニ、ハタラクノアルコトヲ知ガ方考ノ工夫也

□フサシ血ノ脉ト云ヘハ、心ノ主也（血ノ脉、靈枢ニテナトニテハ瘀血ノアル也、アサシ経路ト云ヘハ、肺ノツカザドリ也）

加減潤燥、アクヒクシメハ、中風ニハ多キモノ也

加減除湿――補氣豁痰去湿熱ノ薬也

清熱――有氣トハ、氣ノトゞコリ也

復正――（カロクユク薬也）、驅風――トカクイツモ云コトナレド、方ノ外頭ヲ

ヨクコ、ロヲツケ見ルヘシ

資寿――陽虚ノカタチアル故ニ、精附ヲ用ル也

上池――（ナルホド、ヤラズノカサズノ方也）、内ニハ痰火アリ、外ニハ風湿アル也

小統――（金匱、錦驗、千金ナドニ各アル也） （スコシツ、チカウ也）

入クミシ風邪ニハ、スヘテ用テアル也

血分ニハ熱アル、外ニハ風湿ノ外邪アルニハ、スヘテ必用ノ薬也

人參――敗毒ノ字アレハ、毒ト云位ノフカキ邪毒ヲトル、ナニブン毒ト名ノ

ツク位ノ、風寒湿ノ氣ヲ邪ヲトル、故ニキ、バノ多キ薬也

加味四物、モトハ加減潤燥――ト同コトナレト、此ノ六味ヘ必竟一味ツ、ノ

チカヅキヲ加減シテユキテ、長キ方トナル也

加減四君子、加減除湿――ノ本也、主意前方ト同也

独參――卒中ニセヒ用、元氣ヲタスク薬也、シカシ虚ト見ねハ用ラレヌ也、

痰ナド主トナレハ不用也

氣血ニカ、ワラズ用也、有火熱ニハ參連トシテ用也

二陳――稀涎散トテ、痰ヲ吐セル薬也

大秦――十二経イリマヂリ、明明経、祛風、清熱ト皆兼治スル薬也、秦朮ハ、

血分ニ有湿熱スチ不利ニ主ル

防風通――風熱ト云ヘハ、瘡氣狂乱ナドカ是非添モノ也、風邪ウチヘ鬱スル

也、風刺肺風（カザホロニキヒノヨウニナル也）トテ肺ニ屬

腸風、ハラワタヘ風入テ痔ナト、ナル也、ヌケハ玉子ノヨウナモノ出也、

此方ハ、六乙散ガ中ヘ入テアル也、此方ヲ調合スルトキハ、滑石、甘草

ノ二味バカリ用ル意ニテスル也

補中――此方ヲ中風用ユルコトハ大分アル也、脾胃ノ虚ニヨル外氣ノ風邪ニ

テナキニ必用也

三黄瀉心反三省飲

（半丁空白）

九月十一日夜晴

後世ノ咳逆ハ、シヤクリ、呃逆、傷金ニハ嘔トアリ、色々ノ本アリ、通例  
胃口有水寒、或胃中陽氣虛寒、胃中有痰且夾火、陽明胃、叟明虛火動、胃  
ノ元氣不足シテ起ルアリ、胃中有濕熱、丹下ニ下サスシテ、熱ニテ起ル  
リ、湯茶、氣鬱

加減小—胃中ノ濕熱ニヨル也

十味小柴—是モ濕熱ニヨル也、ソノウチ、氣虛ニ属スルトキニ用ユ

人參—氣虛夾痰ノ証、痰ニテトチル故ニ無脉也

順氣モ—モチマヘニ痰アル上ニ食傷ス

小青龍、トヲシテモトマラヌトキニ、ヨクキクコトアリ

噎氣、ヲクヒ、ゲツフ、胃中鬱火胸臍、蟲積

何レ痰カナケレハ起ラヌ也、痰アレハ氣トゞコヲル故ニ、氣劑ヲ加用

ユ

舌ニ黒氣ノアルハ、胸中有痰之徵也、エテヲクヒナドヲ発

呑酸ハ中吞

胃口濕熱也、湿多ケレハ呑酸ス、熱多ケレハ吐—ス、血虛有火故ニ、産

後ナトアリ、冷積

蒼連—木克土ト、克シテ—スル也、壹酢モ吞—也

噎腐トハ、クサリシヨウナモノヲ、オクビニ出ス也

指縫出水者、脾胃虚シ湿アル也

一口ニ服スル也

通口ニ服スルハ、破リテシマウ也

嘈雜(俗語也)、九月十七日夜晴

ムねノイレル、ムねノナカ、ヤクヨウニアツキ也、

其証ニハ、何レ呑酸ガ添テ居ルモノ也、酒

人ノ二日酔、オモキノヲ食セシアト、食滯ニ—スルハ、アタリマヘ也、

氣鬱、痰火、婦人ナトニマ、アル血虚、血不足シテ氣ト、コル、ソレハエ  
テ夜也、是ヲ五更嘈ト云、夜ル—スルハ、何レ血分ノコト也

二陳

施覆—心下ニ水氣ノアリテ吐水スル也

一方、心氣虚而夾痰也

諸氣門、是ハ、コ、ニテ云ニカキリシコトニテハナイカ、氣血ノ

二ニテ、人ト云モノワ、イキテ居モノ也、元氣血—ナト也、カヨウナモノ

ナレハ、病ノ名トナルヘキハナイニ、病ニテ氣ト云ハ、氣ノコト—クク

ルイヲ云也、ナゼ諸ノ字ヲツケルナレハ、九氣・七氣ナトアリテ(七情ヲ

云也、九—ハソレヘ寒熱ヲソヘル也)、氣ト云モノハ煙ノヨウナモノ、湯氣ノ

ヨウナモノ、口ヨリ出ルユゲノヨウナモノ氣也、氣ト、コレハ、心氣モノ

ト、コル、心ト氣トハ、トントツリ合シモノ也、心シダイニ、氣モ色々

クルウ也、血分トハリ合テ、氣分ト云也、氣ヲメクラシタリ、発シタリス

ル藥ヲ氣劑ト云也、行氣、順氣(方名ニテ按セヨ)、下—降(枳壳、深香)、

理氣(ミタレシヤ—ス)、疎—、ムラヲナフスヲ調氣ト云ヘリ、カシコハヌ

ケ、コ、ハ結テ居、カシコハ熱シ、コ、ハヒヘテ居ナト云ハムラ也、ソレ

ヲト、ノヘル也

氣ノクルイブリ、イロ—アル故ニ諸ト云ヘリ、血ノ病カ氣ノ病

ナト、全躰ワケねハナラヌ

分氣、氣カタ第一番ノ藥也、万病氣ニアツカラヌト云コトハナイモノナレ

ト、氣ガ主トナルヲ云也

分—心氣—ト云コトニテ、心ト氣トコリテ、ムスホレル也、心ハ主人、

氣ハ臣下也、君ト臣下トねカラワカラヌヨウニナリテクル也、木ヲ蔓

ガマキ、タヲスヨウニナリシヲ、ワカツヨウナモノ也

不和トハ、ムねガツカヘルノ、腹ガツカヘルト云ヨウニ、下ニ不和ヲ

弁ス

大腸虚—ハ、スナワチ大便閉ル也

気メクラザレハ、ゼヒ水ト、コル也

胸膈緊トハ、ク、リシメシヨウニナル也

加味四君子—補益門カ、内傷門ニ出ヘキ也、補氣ノ藥ハ出テ居ラヌガヨロシ

行氣、イツイテ居氣ヲ、アヨハスルヨウニスル也

順氣、逆セシヲ本道ノ方ヘ—ニスル

和氣補劑ニテモ、瀉劑ニテモ氣不和氣ヲ和スル也

(半丁空白)

虚勞門、霞天膏、医方集解ニアリ

王損菴—虚勞治療ノ始終見合ニナルコト故ニ、此ニ載ス

吐血門、以下、血症ノタクイヲ幾色カ門カ、別テアル、一体血症ハ、血ヲタゞ吐血ト云ハ、カバリノト血ヲ吐ク也、唾血ハツワニマチル也、咳血ハセキニマヂリ出ル、咯血トハ、カアーツト云ヘハ、カタマリ出ル、吐血ハマダ、反テカルキコトアリ

便—、溺—、肌衄、<sup>チク</sup>牙—、<sup>チク</sup>膈—、舌—、牙—、鼻—、血箭トハ、イボナドヲカキ、ホソクハシル

血ヲ出サマイトスルニ、氣ニ守リヲツケルモノ故ニ、補氣スルコトモアリ、涼血、降氣、行氣、補腎

腎虚力脾胃カ、或—ニ瘀血アルカ、或ハ傷胃吐血カ、血ノ守リカワルイカ

加味道—血熱— 白汗ハ冷汗也(素問ナドニテハツねノ汗也)

二和—

桃承—瘀血

独参、陽氣ノニワカニ虚セシニ用ユル、氣ヲツナク(産前産後、金瘡、吐血

衄血)

一方、是モ前ノ方ト同シ

清肺—痰火ノ方ヲトルコトヲ第一トス

清火涼血—生姜皮ハ、生姜ノ功ニテ、イコウ熱シサセヌ、生姜ヲ用ルニハ、痰アレハヨロシナレトモ、サモナケレハワルイコトアリ

清火—方ノ名ニ氣ヲツケテ見ルヨロシ

涼血地黄—

医王、其血必散、水ニ入レハ血散ス

一方、此方ト独参湯ノ意ヲヨク捨別シテ治療セヨ

加減四—、肺ニ火カ出来テ吐血スル也

小薊、アザミノね、ヨク瘀血ヲメクラス

枇杷葉—コ、ニハ、血ノ症ハナケレトモ、コ、ニアレハ、中暑ニテ吐血ナ

トセシ也

花苳□不散ハ血ドメ也、悪血ハサリテ、内外トモノ血ヲトメル理中—傷胃吐血ノ正面也、□セマリ、脾胃ヲ補イツクロウ也

加味苳—胃中有瘀血吐出也

麦門冬—肺ト腎トノ虚ヲ補也

本方—吐血ノ実症ナルニハ、必此方ヲ用ユ

虚勞門口義

コノ虚勞ト云フガ金匱ニアルハ、虚勞ハ至テクルワヒロクテ、スヘテ虚ニテツカレタルニハ、皆ナ—ト云名カツイテ居、腎虚肝—脾胃—ナニテモ、皆虚シツカレタルハ皆虚勞トアル、クルワヒロヒ也、千金方ナトニテモ、

虚損ト云トクルワヒロキ也、後世虚勞ト云ノハセマク、今世上ニテ云虚勞也、今勞咳、疝勞、勞瘦ナド、云、皆此門入ル也、血脉ニテ、ツ、キ

アルヲ伝屍ト云ヘリ、夫モコノクルワニ命スル、トカク—ト云テ、ア

タマヨリ点カ、ルテハナイ、明虚火動ニナルトムツカシイ、明ノ虚シヨ

ウスクナク、火動シヨウスクナイト、皆虚勞デモ本服ナル也、全体世間虚勞ト云ニコ、ロヘルコトハ、今小児ノ疳ノ虫ヨリシテ疳勞起ルヤ、腎虚ヨリ起ルヤ、或ハ大ニ血ヲ脱シテ、血虚ヨリヲコルノヤ、段々肝鬱ガツヨクテ起ルノ多イ、是カ一チナヲリヨイ、血虚ノモナヲリヤスイ、小児ノ疳ヨリノハナヲリヌクイ、伝屍ト云ノハ、カタデテンノカ、ルノ也、肝鬱テモ血虚テモ、火動ニナルトナヲラス、火動ニナラヌマハハ、スイブンナヲル、又カクベツハケシイ病症モ起リモセヌ、虚勞ノ療治ハ、十薬神書ニ出テ居、是ニトカク四花患門トテ、灸ヲスヘルコト也、是ハ肝鬱ノニヨロシ、スコシモ火ノヲコリカケタルニハ、灸スルハケツシテヨウナイ、世間其火ノ起ルノヲシラズ、灸シテ死ヌル多キコト也  
明虚火動ノ症ニハ、必ス脾胃ガ虚シテ居ル故ニ、弁ト明ヲ補コトモ出来ヌクイ

生姜汗ニテ用ユルハ、口ニねマル故ニヒラク、多ニ用

衄血、十一月念三日、同雲欲雪、西風捲雲晚、未報新、清明燭三条、講帷如晝

風寒外邪閉表、傷寒輕數日者陽明之実熱也、暑邪、虚勞、鬱火  
凡血症者麻疹之余毒

血分有熱、血ヲダチ出ル、鼻ハ陽分也、陽分へ血逆スレハ衄ス、明分へ逆スレハ吐血ス、皆血熱ヲサマス薬ナレハ、衄吐トモニ薬ハ通用カテキル

一方、栝葉側——血分ノ氣ノミタレタルヲオサム

八物——独參ハ、カノ虚勞ヒタチノ衄ニヨロシ、シユロノハイヤ、乱髮ヤヲ用、鼠屎ヲ鼻ヘフクナドノコトモアリ、是等ノコトカ通例ノ治方也

止衄——七情ノ氣鬱ニヨリテ衄スルニヨクキク  
加味——、傷胃——ヲ治ス

咳血、虚勞ノ症也、虚勞門トマチヘ、老ヨハキブリニヨリテウミ

アルハ肺癰也

血ヲオサメルト、セキヲトメルトノ二ツノ治アリ

一方、セキニテ痰出、肺ノカワク也

咯血、痰ノ中へマチル血ナレト、痰中ニコモルヨウニマヂル、又

血バカリ出ルハ、トリノドリノヨウニナリテ出ル也、尤モ肺火ヨリ出ナ

レト、根ハ腎カモト也、——ハ吐ク声也

清咯——柳桂、桂ノ枝ノホソキトコロ也、尤モアサミヘユク

一方、是ハ咯血ニテハナケレトモ、病ノ筋ハ同故載ス

「茜草、紅花ニ似テ血熱ヲサマス」

吐血、有声曰——、無声曰——、是ハ酒毒、大ニ怒、大ニ脾胃虚ノ

三症ヨリ来、莖汁、惡血在胸ヲヒラク

第二一方、脾胃虚有瘡氣故也

唾血、ツワノ中ニ鮮血ノマチリ出ル也、腎血ヲ補イ、兼テ肺ヲ補

清——腎ノ方ノ専ラ熱ヲトル

補——八物湯ノ意ニテ

便血ハ下血也、痔トハ分也、痔ハ、肛門ノコグチヨリ出ル也、同

シ便血ニテモ、マアツカナハ是ヲ近血ト云、腸風ト云也

血黒キハ遠血ト云、又臟毒ト云、臟毒ハヲモシ、風寒湿ノ氣ガ腸ヘアタ

リ起ル多シ、敗毒加減、金正ナト

心配、腎虚脾胃虚、十補八物医王、(膏飯カタチノ薬用)産前後ノ——モ

全、血熱実ニ属下ス、通例酒人ニアル、金正九文加減

下血、黄胖ノ筋ト全シヨウニ、爪ナトヒシヤケテクルアリ、鍼砂緑ハンノ

薬ヲ用ユ

肛門ノカタワラニ、ホソキアナアキテ、ハシリヂト云アリ、是ハ此門ニ

入ル、痔ハ肛門へ虫出来ハミ起ル、此門ハ、ハラワタニアツカルタケチ

ガウ、シカシ大法同シ

槐角、エンジュノサヤ、椿根皮ハ、婦人ノ白血、ナカチチナトニモ用ユ  
（血分下ノ濕熱ヨクトル）

腸風、フンゼンニ下血スル也

八宝—黄連解毒ノ加減也

金鳳花、痔ナトニモヨロシ

升陽—前ノ方々トハ、クミカタカチカイ居ル也、トカク陽気下ヘサカリ、

腸中ニ風アル也

生炙甘草二味ヲ用ルハ、凡ソウチノ火ヲ写スル也

医王加減

加味四君子、脾イヨワク、血ヲセイスルコトアタワス—ス、是モ黄胖ノ

筋ノ也、医王モ同シ

溺血、一口ニ血熱ヨリ起ル、小腸旁光ノ血熱ヨリス

心勞、酒毒、思量傷脾、腎虚ノ类

一方、藕芎

汗証、ツね汗多キ也、皮フカツねニウルヲイ居也

外邪タルケレハ湿

風寒暑湿ハ通例也、胃熱、食後多汗

四支冷—黄芪人參、虚勞、心勞、肝熱逆上スル也

二陳—痰厥ノ頭痛ニ用方也、夫ニ加減シテ—ニ用ユ、痰ニ氣アツマリ、

腎ニ氣コモラヌ也

举足アヨブ也

医王加減、神勞ニテ腎氣ヲ上ヘツリアケシ也

（半丁白紙）

劑頸而環、アタマハカリ出ル

大承氣、実ニ属スルアリ、虚ニ属スルアリ

四支心胸ナトニ出ルハ虚勞也、黄汗ハ、黄胖門ニテ療、外邪ノ後ニ、盜

汗ハ是ニツイテ邪ノ去、吉兆ナルアリ、或ハ虚勞ノ方ヘ入テユクアリ  
小児ナレハ疳ノ虫ニヨル、大人ナレハ腸虚力腎虚力別也

当六黄—通中トハ一時ニ服也

当—浮麦ハ、心ノ虚シツカレシヲ治ス

ムキノ水ノ上ヘウクノ也

参—

茯苓補—是ハ常ノ—トハチカイ汗証門ノ—

心孔トハムねヲ云也、臆中ノトコロ

大補—腎虚多汗ノ症也

黄芪六一—蜜ニテ脾胃肺ヲ別テ補也

便附子

虚風ハ陽虚シテ、中ニ風邪ヲ含居也

眩暈、十一月晦、雪北風寒

眩トハ、クロナルコト、暈、ボウトスルコト也、目ノマウ也、マウホウ

ハ暈也、一口ニ—ニテ目ノマウコト也、アタマノグラツク、アンドノ

火ノトヲ、ナル、家ノマウナト皆—ノ部类也、—ノ症ハ、痰飲ノア

ツカルコトヲ、シ、因、痰飲痰火心下有水気、氣カタ（肩ノトコロニテ頭

痛ス）、血虚、陽虚、中風ノキサシ、是ハ全ク痰火也、是も必ス頭痛カ

ソウ、内傷脾イ虚、腎虚ムカツキヲ兼ルハ、多ク痰飲ニアツカリ、腎虚

兼火下冷ル

五積散、暑邪（痰飲、暑邪）、中湿、肝積ノ有人、肝火、上逆、舟暈（船

暈）、浮車病、鍼暈

清暈—痰ヲトリ、上ノ熱ヲトリ風ヲ去ル

風痰トハ尤も此方ヲ用ユコト也

加味四君—

加四—

加減二一医王、ヨウアル症也

参附一至テアヤウキ症也、シキリニアセナト出

防通、火鬱ノ人ノ一ニモヨイ

清痰除一風痰ガモト也

芍皈一参附ヲ用ト一ヲ用ト二筋アルヲ、ヨクコ、ロヘルガヨシ

川芎一肝臓ノ虚風也、俗ニ云、肝症ノ虚ニ属スル也

釣藤一、是モ俗ニ云癩症ノ逆スル也、肝火ヲオビ

(後欠)

丹羽之文字、向後丹波と被相改候儀、  
御許容ニ候、依而執達如件

医道長上丹波家  
錦小路殿役所(印)

天保十二辛丑年  
正月十日

丹波衛門殿

## 5 御陣屋御用医仰付及帯刀免許状写

川北村

丹羽周伯

右者、御陣屋療治出精ニ付、

御陣屋御用医被

仰付、帯刀被差免候

申

十二月十六日

## 6 丹波姓使用免許状

神農殿医学館御再造之事

累年御宿望之所、今般思召立ニ付、

御同意有之、厚御取持被成上候段

不斜

御満足之御事ニ候、依之、其家名

資料解説



丹波家は近世から近代にかけて現在の三重県四日市地域において医を生涯としていた家で、幕末から明治期にかけては本草学者の丹波修治を輩出したことでも知られている<sup>1)</sup>。修治については本草学に関する本人の著作物や関係資料の研究が進められているが、代々医業を営んできたとされている丹波家の姿や、修治が家業である医療とどのように関わっていたのかについては現在のところ注目されておらず、分析の余地を多く残している。

三重県総合博物館には、医療関係書をはじめとする丹波家の史料が膨大に収蔵されている。今回は同館の丹波家文書の一部を翻刻したうえで、各史料についての簡単な解説と考察を付した。翻刻を行ったのは、丹波家文書中史料番号483、486、487、492、803、989の六点である。

この六点という数は丹波家文書の全体数からみればきわめて少数ではある。しかしながら、医家丹波家の社会的な立場を示す史料や、地域社会における漢方医学の講義と研究の様子を窺い知ることができる史料を取り上げており、その意味で大変重要であると考える。これまでほとんど知られてこなかった丹波家の医家としての側面に光を当てることで、後の丹波家研究および地域医療史研究の一助となれば幸いである。

### 江戸時代の医家丹波家の社会的立場

史料番号803は、「川北村丹羽周伯」充てに出された御陣屋御用医仰付及帯刀許状である。丹羽周伯は前述の丹波修治からみて養祖父にあたる人物である<sup>2)</sup>。これによると、周伯はかねてより陣屋で治療行為に出精していたため、陣屋御用医に任命され、帯刀も許されている。「申十二月十六日」の日付があるが、この史料の明確な時期については未だ分析の必要がある。史料番号989は、当時の堂上家である錦小路家から丹波衛門（修治の養父<sup>3)</sup>）充てに出された丹波姓使用免許状である。錦小路家は平安時代に『医心方』を著した丹波康頼を輩出した丹波氏の、堂上家としての家名で

ある。これによると、錦小路家が所管していた「神農殿医学館」を「御開造」する際に、丹波衛門が支援を行ったことが錦小路家の「御満足之御事」であったため、今後家名を「丹羽」から「丹波」へ改めてよいとの許しをいただいている。丹波家はもともと丹羽姓であったのだが、錦小路家からいただいた丹波姓を以後使用していくことになる。諸史料で「丹羽」と「丹波」の二通りの字が用いられているのはこのためと考えられる。

錦小路家は広い地域から門人を募って医学教育を行っていた。三河国および伊勢国では、錦小路家が門人を統制し医家組織を作らせていたことが分かっているが<sup>4)</sup>、丹波家のように姓を与えられた門人がいたなどということはなく、丹波家が他の門人と同じように医学教育を受けていたかどうかも定かではない。丹波衛門の錦小路家への支援、それに対する錦小路家からの褒美とも捉えられるような丹波姓の許しは、かなり特殊な事例なのではないかと考えられる。

### 明治初期の写本にみる文政期の医学教育

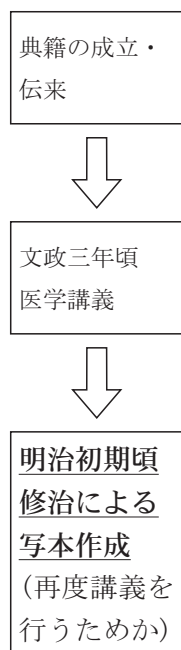
史料番号483、486、487、492は、漢方医学の講義内容に関して書き留めた記録（ノート）で、筆跡は同一である。史料番号483には「金匱要略口義」の題、486には「黄帝内経素問発端」の題がそれぞれ付されている。『金匱要略』『黄帝内経素問』はいずれも中国発祥の有名な漢方医学書である。また、史料番号487「方彙記聞」は、この「方彙」という語句及び本文の内容から、『古今方彙』という処方集をもとにした講義に関する記録と思われる。史料番号492には表題がないが、本文の内容から『古今方彙』に関連していることは明らかである。487と492を合わせて、ここでは「方彙講義」と呼びたい（『古今方彙』と照会したところ、講義の順番としては492が最初であり、487がそれに続くことと考えるのが妥当であろう）。

最初に確認しておくべきこととして、これらの講義記録の筆跡はすべて

一致している。丹波修治の筆であることが明らかな著作物（『屠荒集』『内國勸業博覧會府縣藥種品評表』それぞれ国立国会図書館蔵）と、これらの筆跡を照合したところ、明治時代初期頃の修治の筆跡と一致する字が多くあった。このことから、一連の医学講義関係記録は修治が書いたものである可能性がきわめて高いことがわかる。丹波修治は幕末から明治時代にかけて活躍した本草学者として有名だが、医家である丹波家に養子として入ったにもかかわらず、当時の医学と修治との関係については未だ明らかになっていない点が多い。今回翻刻した『金匱要略口義』『黄帝内経素問発端』『方彙記聞』は、修治と漢方医学との関係を考えるうえで大変重要な史料なのである。

次に、これらの史料の成立年代について考察せねばならない。『黄帝内経素問発端』の最初の部分には「文政三年四月七日」の日付があり、「方彙講義」の記録は「皇文政三年歳在庚辰五月七日夜開講」との記述から始まっている。『金匱要略口義』の記録には日付等は見当たらないが、筆跡や書式から同時期に作成されたものと推測される。丹波修治は文政十一年（一八二八）生まれであるため、これらの史料の成立年代と医学講義が行われた時期の関係については慎重な議論を要する。しかしながら有力な可能性として挙げられるのは、文政三年頃に行われた医学講義記録を修治が入手し、明治初期頃に写しを作成したということだ。そのうえで、自らの考察などを加え、再度講義を行うために、この記録が使用されたのではないかと考えられる。

つまり、史料の成立にいたるまでの時系列関係はこの図の様になっている。



なお、丹波家文書にある医学講義の記録はこれがすべてではなく、未だ調査中の史料も数多く残っていることを断っておかねばならない。

ここからは、以上のような仮説にもとづいて、各史料について概要を説明したい。

まず、「黄帝内経素問発端」について説明する。題にある「発端」および本文中の「黄帝内経カラセシハ」との文言から、一連の医学講義のなかで最初に行われたのが、この「黄帝内経素問発端」だったと考えられる。

前述のようにこの史料の最初には「文政三年四月七日」の日付がある。修治はこの日に行われた講義の記録を入手し、明治初期頃に写本を作成したと思われる。

『黄帝内経』とは、中国における漢代の『漢書』藝文志にその題がみられる医学書で、『素問』『靈枢』各九巻、計十八巻から成るとされている。後漢末の張仲景による『傷寒論』などに影響を与えたが、歴史が古いため原本は現存せず、南北朝の全元起、唐の王冰などによる整理、改訂が行われた。

『黄帝内経素問発端』は、漢文の治療書である『黄帝内経素問』の解説が話し言葉で書かれている点が大きな特徴である。『黄帝内経素問発端』の前半では具体的な医術についての伝授というよりは、医学そのものの概論および学ぶ者としての心得などが述べられている。「此書ニソムケハシメ医術ハ異端邪流也」という力強い文言から、伝統的典籍である『黄帝内経素問』が医術の正道と位置付けられていることがわかる。一方で、「近來ニ至リテ古方家ナト云ヨウナモ出テ素靈（素問・靈枢）ナトヲ明邪流ノ説ナト云」「世間一統ニ素靈ノヨウナマワリトワイヤクニタ、ヌモノナト云」とあることから、当時（文政期）の医家たちのなかでも『黄帝内経』を重視するかどうかは意見の分かれるところであったようだ。ここでは

『黄帝内经』を軽んじる風潮を「氣ノ毒ニ存ス」とし、「夫ラニ陥ラヌヨウニ一生正道ヲトリウシナラヌヨウニ」せよと説いている。

そのための具体的な方法として、「前日ニシタヨミシテ朝聞又アトヨミスル」がよいと述べ、『黄帝内经素問』をよく読み込むことが推奨されている。さすれば「一生ノ医道ノタネ」を得ることが出来るだろうというのが、『黄帝内经素問発端』の講義の主意と言える。この講義は初学者のための入門編と位置づけることができるだろう。

また、この講義の後半は「上古天真論(論)」についての解説である。上古天真論とは、王冰の編纂によって『黄帝内经素問』の巻頭に差し込まれた章で、それ以前の全元起は巻末に編んでいたという。王冰の上古天真論に「昔在黄帝、生而神靈、弱而能言、幼而徇齋、長而敦敏成而登天」という一節があり、この部分の解釈は「生トハギヤツトウマレシトキ也、神靈瑞相アリテ常ナラヌ也、登天トハ天子ノ位ニ即セラレタル也、登天聡明トモシテアル、天師トハ天ノ徳ヲソナヘシ師ヲ云也」と述べられている。「登天」を「天に昇る(死ぬ)」とせず、「徳を備えた天子となる」と解するのは竹中通庵の『黄帝内经素問要語集注』にみられる解釈であるため、講義の底本となったのはこの本ではないかと考えられる。

次に、「金匱要略口義」について説明する。この講義記録は「聞説城南才子家 磯野弘道ノ親玄仙瓜葦ヲ用ユル奇談」との記述から始まっている。磯野弘道とその親原泉(玄仙)はともに著名な医師であったが、当時の医学教育との関わりについては未だ議論を要する。

『金匱要略』とは、『傷寒論』の著者として知られる張仲景によって後漢時代に作成されたと考えられている雑病治療集に端を発し、散逸したのち宋時代に再発見され、編集・成書された『金匱方論(金匱要略方)』の通称である。宋時代の版は失われ、現存する最古の版は元時代のものであ

る。

この元時代の版を「鄧珍版」と呼ぶが、鄧珍版からはさらに改編、新條の追加が重ねられていく。その中で趙開美は、万歴二十七年(一五九九)に『仲景全書』を著し、「金匱要略方論」の章を設けた。『仲景全書』は日本へもたらされた後、承応元年(一六五二)に徳川家の蔵書として入架された<sup>12)</sup>。

『金匱要略口義』に使用されている文言をよく検討してみたところ、底本となっているのは趙開美の『仲景全書』中の「金匱要略方論」の章であると思われる。ただし、真柳氏によると江戸時代には、趙開美『仲景全書』とは別の『仲景全書』が幾度も刻刊されているという<sup>13)</sup>。この別版『仲景全書』は江戸の書賈が趙開美『仲景全書』に手を加えたものであり、多くの医家によって読まれていたのはこの別版であった。『金匱要略口義』の講義を行った講師は、おそらくこの別版『仲景全書』中の「金匱要略方論」を参考にしていたと思われる。

もつとも、これ以外にも日本において江戸時代を通じて作成された『金匱要略』の解説本・注解本は多数存在する。真柳氏によると、明時代の「無名氏版」「兪橋版」などが日本へもたらされ、無名氏版は多紀元簡による『金匱玉函要略方論輯義』へ、兪橋版は森立之による『金匱要略攷注』へ、それぞれの書式や使用文言などが受け継がれていった<sup>14)</sup>。

さて、今回翻刻を行った丹波家史料の『金匱要略口義』は、『黄帝内经素問発端』の手法と同様、漢文である『金匱要略』の解説が話し言葉で書かれている。第二十五章までである『金匱要略』のうち第一章から第十一章までしか確認できず、しかも第四、第六章は全文、第一章や第五章も一部の文章が省略されている。全体にわたって省略部分が多くみられることから、受講者は有名な医学書である『金匱要略』の内容を既に知識として備えていることを前提に、講義が進められているものと考えられる。

しかしながら『金匱要略口義』は、『金匱要略』内の語句の説明だけでなく、病状や脉證などの具体的な表現、病の原因や理論、そして薬種の効能といった詳細な説明がなされている点で非常に特徴的である。

『金匱要略口義』は『金匱要略』序論を欠き、第一章「臟腑経絡先後病脉證第一」の第一項と第二項は省略され、第三項にあたる部分から記述が始まっている。この第三項の冒頭に「問曰」とあるが、そもそも『金匱要略』は弟子の質問と師匠の答弁の問答形式で書かれており、弟子の質問は「問曰」の文言から始まっているので、その書式を踏襲したものと思われる。『金匱要略』の「問曰」は全篇にわたってみられるが、『金匱要略口義』ではこの一か所のみである。

続く「全体此篇ハ仲景ノ語ト云ヲチキレノニナリテ居シヲアツメナセシモノト見ヘテ故ニト、ノワヌ也」とは、前述したような『金匱要略』の長い歴史と複雑な成立過程について述べているものと思われる。

最後に「方彙講義」について説明する。『古今方彙』とは甲賀通元（生没年不詳、十八世紀前半に活躍）による処方集で、延享四年（一七四七）に初版、安永期、文化期に重版されるほか、解説書も出版されるなど当時の医家たちによって広く知られていた<sup>13</sup>。

『古今方彙』は中風から始まる各症状を一つの項とし、それに対する薬を作り方とともに紹介するという構成で、それぞれの病気や薬の効能についての解説はない。講義では、各症状の詳細な解説を行ってから薬の言及に移っていることから、『古今方彙』をさらに噛み砕き、わかりやすくしたものであると言えよう。

この講義記録は「皇文政三年歳在庚辰五月七日夜開講」との記述から始まっている。「全躰ノ発端去年述シ故ニノヘズ」とあるが、「発端」とは「黄帝内経素問発端」の講義を指していると思われる。「黄帝内経素問発端」

の講義は文政三年四月七日の日付があり、「方彙講義」は同年五月七日に開講した。「発端」で既に述べた内容については語らないという講師による断わりであろう。

この講義の目的は「百病ノ治例ヲ知ル」ためとされている。「方」つまり具体的な薬の処方について講習することで「百病の治例」を示そうと試みているのである。一方で、「病ノ本ニナリ起ルトコロヲ覚ルナトハ皆病論ノ学門也」としたうえで、「世間一トヲニ病論ノ学門ト云事ハナシ也、夫ヲ知度ナレハ回春、正傳、入門、手廣ニスルトキハ準繩ナト」を勉強する必要があるのであるという。「病論」と呼ばれる「病ノ本ニナリ起ルトコロ」をまとめて学ぶ学門は未だ確立していないので、参考文献を手広く読むべきだと述べられているのである。ここで登場する「回春」「準繩」とはそれぞれ、『万病回春』と『証治準繩』を指していると思われる。

「コナタノ家ニ随証門ト云モノ一卷アル」「コナタノ家ヘツキ学門ヲセねハナラヌ」とあることから、この講師が医学教育を行っている医家であることがわかる。しかしながら「其流其人ノクセナドモアルモノナレハ（中略）其家其人ノ仕来リノ治例ナトモアルナレハ、取捨スルハ其人ニアル也」とことわっていることから、この医家の流派をそっくりそのまま受講者が受け継ぐわけではなく、医療者個人による「取捨」を期待しているようでもある。処方集である『古今方彙』を基盤としつつ現実的な視点を付け加え、次の時代の医療を担う受講者へ伝えられているのである。

（西村悠佳）

1 松島博『近世伊勢における本草学者の研究』（講談社）

2 同右

3 同右

- 4 田崎哲郎「錦小路家門人の一形態」『愛大史学』第十号（2001）
- 5 左合昌美『よくわかる黄帝内経の基本としくみ』（秀和システム、2008）
- 6 宮澤正順『素問・靈枢』（明德出版社、1994）
- 7 同右
- 8 荻原稔「井上正鐵と気吹舎の接近」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第十三号（2021）
- 9 真柳誠「『金匱要略』の成立と現存版本」『漢方の臨床』57卷3号（2010）に一部補足
- 10 真柳誠「明刊趙開美原刻仲景全書本『金匱要略方論』解題」（東京・日本漢方協会、1985）
- 11 注9に同じ
- 12 注9に同じ
- 13 小曾戸洋『日本漢方典籍辞典』（大修館書店、1999）



あとがき

本冊で取り上げた三重県総合博物館所蔵の『丹波家文書』は、旧県立博物館時代に収集した資料で、2期にわたって入手したものです。このため分量も非常に多く、内容も多岐にわたっていることから、現在も調査・研究中です。その状況のなかで、今回、江戸時代後期の漢方医学の講義資料を翻刻できたことで、本草学者丹波修治を輩出した丹波家の理解や、収集資料の活用を進めることができましたと考えます。

丹波修治は、近代の三重県を代表する本草学者であり、『丹波家文書』中には修治に関する資料も多く含まれています。また、修治が大きく関わった明治十年（一八七七）の第一回内国勸業博覧会に関する資料も散見されます。今後も『丹波家文書』の調査・研究を進め、翻刻紹介できるよう努めていきたいと思えます。

資料叢書では、当館が所蔵する資料を中心に、三重県の自然や歴史・文化・民俗にかかわる資料について掲載し、ご紹介していく予定です。ご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

三重県総合博物館

三重県総合博物館資料叢書 No. 12

令和八（二〇二六）年三月一八日発行

編集 三重県総合博物館

発行 津市一身田上津部田三〇六〇

電話 〇五九（三二八）二二八三

FAX 〇五九（三二九）八三二〇

印刷 共立印刷株式会社

津市安濃町今徳西前野九〇一

電話 〇五九（二六八）四二一一

MieMu | みえむ |